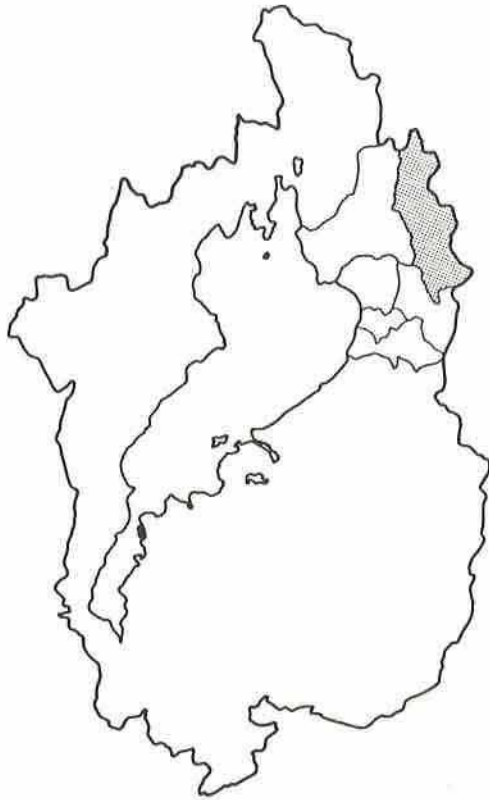


伊吹町内遺跡発掘調査 I

高 番 遺 跡
杉 沢 遺 跡



1992. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

滋賀県の最高峰・伊吹山の山麓に拓けた伊吹町は、東日本と西日本の両文化の接点として歴史の表舞台に度々登場しています。古くは伊吹山麓を中山道や北国脇往還が通り、現代は東海道本線・新幹線・名神高速道路など日本列島の大動脈が通過しています。このような多くの人間の通過は、歴史だけでなく言葉・信仰・風俗・食生活などの民俗学的なものを盛んに移動させて、伊吹町の文化を形づくり花開かせました。

県下でも有数の縄文遺跡密集地、平安の山岳密教寺院の華やかなりし頃を想像させる巨大な遺跡群、中世の北近江を支配した佐々木京極氏の城館跡など、その時代を代表するような遺跡が町内に所在しています。

今回は場整備事業に伴い発掘を行った高番遺跡では、弥生時代から平安時代にかけての土器が出土しました。また、範囲確認調査を行った杉沢遺跡でも、その重要性を考える上で必要な資料を得ることができました。

これら町内に残る数多くの諸遺跡は、地域の歴史、文化を理解する上で欠くことのできない公共の財産です。そしてこれらの文化財を後世に伝えるのは、今を生きる我々の責務なのです。

この報告書が地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるために僅かでも寄与することができれば幸いです。

末筆になりましたが、調査に御協力いただきました関係諸氏・関係諸機関に厚くお礼申し上げます。

1992年3月

伊吹町教育委員会

教育長 石河竹二郎

例 言

1. 本書は伊吹町内における平成3年度団体営土地改良総合整備事業（一般・区画整理、高番地区）に伴う高番遺跡の発掘調査、ならびに杉沢遺跡の範囲確認のための発掘調査に関する報告書である。
2. 高番遺跡の発掘調査は平成2年度より平成3年度にかけて実施し、杉沢遺跡は平成3年度に実施した。以後平成4年3月20日まで遺物整理・報告書作成をおこなった。
3. 調査は伊吹町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。

調査主体	教育長	石河竹二郎	
調査事務局	伊吹町教育委員会	課長	山田 登（平成2年度）
	社会教育課	”	堀内安夫（平成3年度）
	課長補佐	山本忠明（平成3年度）	
	係長	伊富貴鉄雄（平成2・3年度）	
	主任	谷口隆一（平成2年度）	
	”	藤敦幸子（平成3年度）	
	主事	松井富美子（平成2年度）	
	”	的場文男（平成3年度）	

調査担当者 技師 高橋順之

調査作業員 西川 宏・後藤美智子・宮川満子・藤田泰之・久保光夫
奥村 馨・滝沢日出夫・藤敦正幸・中辻政樹

4. 出土遺物の整理、復元、実測に関しては上記作業員のうち西川・後藤・宮川・藤敦・中辻でおこなった。
5. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言等種々の協力を得た。記して厚く感謝の意を表す次第である。

兼康保明・丸山竜平・中井 均・土井一行・宮崎幹也

桂田峰男・福永円澄・辻村彦治郎・藤田和彦（順不同、敬称略）

高番ほ場整備組合・杉沢区

6. 本書の執筆・編集は高橋順之がおこなった。

目 次

高番遺跡の調査

第1章 調査にいたる経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 調査の経過	3
第4章 調査の結果	3
第5章 出土遺物	6
第6章 ま と め	11
出土遺物観察表	

杉沢遺跡の調査

第1章 調査にいたる経過	36
第2章 遺跡の位置と環境	37
第3章 調査の経過	38
第4章 調査の結果	39
第5章 出土遺物	43
第6章 ま と め	44

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図

〔高番遺跡〕

第2図 高番遺跡位置図	1
第3図 トレンチ配置図	4
第4図 検出遺構平面図	5
第5図 トレンチ2東壁土層断面図	5
第6図 「ミシマサン」位置図	12

第7図	出土遺物（トレンチ2 SK1・SO2①）	14
第8図	出土遺物（トレンチ2 SO2②）	15
第9図	出土遺物（トレンチ2 SO2③）	16
第10図	出土遺物（トレンチ2 SO2④）	17
第11図	出土遺物（トレンチ2 SO2⑤）	18
第12図	出土遺物（トレンチ3 SO3①）	19
第13図	出土遺物（トレンチ3 SO3②）	20
第14図	出土遺物（トレンチ3 SO3③）	21
第15図	出土遺物（トレンチ3 SO3④）	22
第16図	出土遺物（金属器）	22

〔杉沢遺跡〕

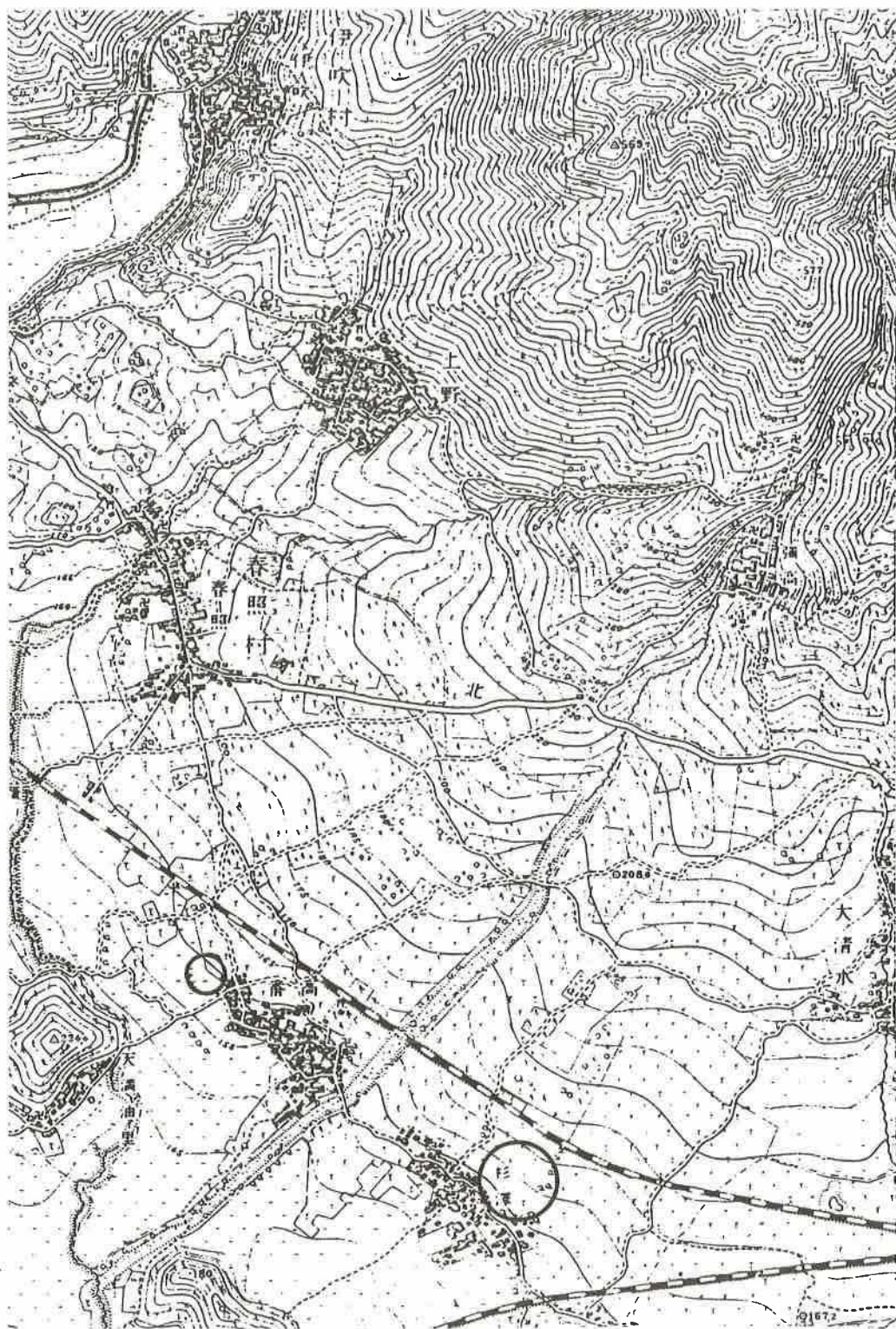
第17図	杉沢遺跡位置図	36
第18図	伊吹山麓縄文遺跡分布図	37
第19図	トレンチ配置図	38
第20図	トレンチ1検出遺構平面図	40
第21図	トレンチ2検出遺構平面図	41
第22図	遺構断面図	41
第23図	集石状遺構平面図	42
第24図	集石状遺構断面図	42
第25図	出土遺物	45

写 真 目 次

写真1	ミシマサン1	12
写真2	ミシマサン2	12

図版目次

- 図版1 調査前状況・作業風景
- 図版2 トレンチ1全景・トレンチ2全景
- 図版3 遺物出土状況(SO2)
- 図版4 トレンチ3全景
- 図版5 遺物出土状況(SO3)
- 図版6 出土遺物(SK1・SO2)
- 図版7 出土遺物(SO2)
- 図版8 出土遺物(SO3)
- 図版9 出土遺物(SO3)
- 図版10 出土遺物(SO3)・金属器
- 図版11 出土遺物
- 図版12 出土遺物
- 図版13 出土遺物
- 図版14 出土遺物
- 図版15 作業前状況・トレンチ1全景
- 図版16 トレンチ2遺構面1・2
- 図版17 集石状遺構
- 図版18 出土遺物



第1図 調査地位置図(明治27年)

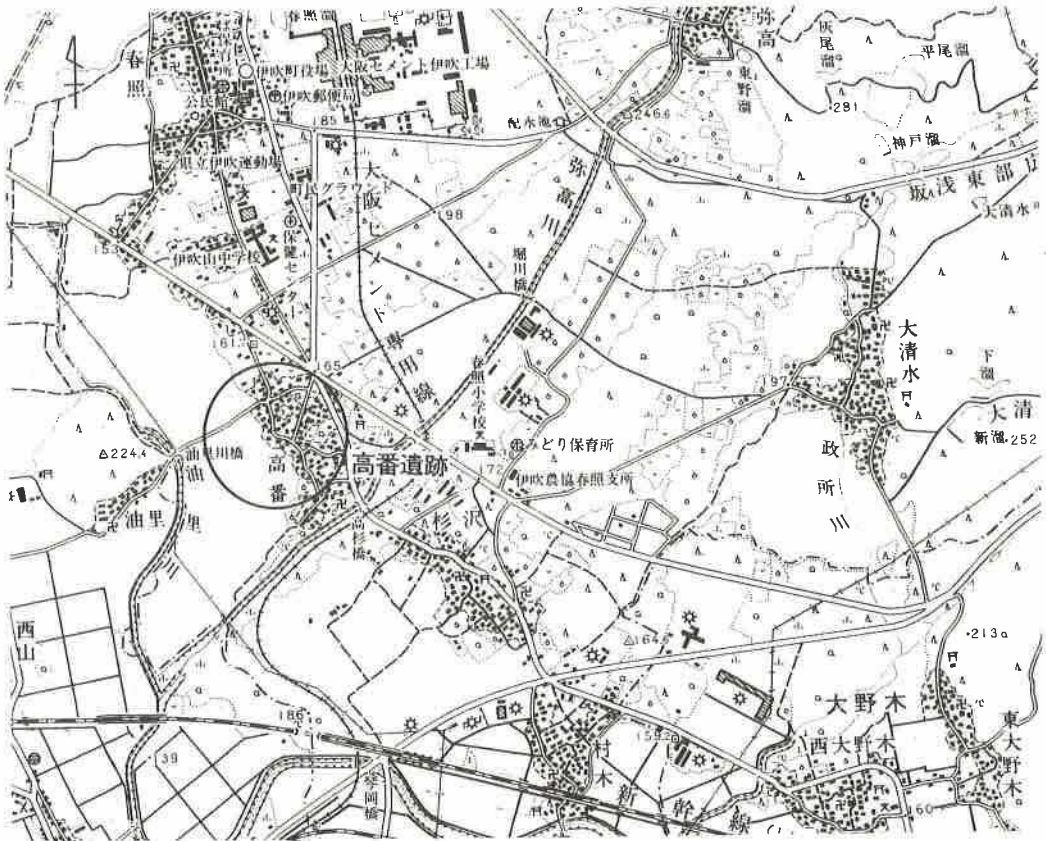
高番遺跡の調査

第1章 調査にいたる経過

滋賀県坂田郡伊吹町高番には、周知の遺跡として集落の中央から南東端の弥高川に及ぶ範囲に高番遺跡が所在している。同遺跡は縄文時代から平安時代に至る複合遺跡として周知されている。しかし、その性格については詳細に分っていない。

今般、団体営土地改良総合整備事業（一般・区画整理、高番地区）が計画され、高番遺跡で事前に発掘調査の必要性が生じた。

調査は伊吹町教育委員会が実施し、現地における発掘調査は、平成3年1月24日より2月22日までと、4月8日から5月1日までおこなった。



第2図 高番遺跡位置図 (S=1:25,000)

第2章 遺跡の位置と環境

■ 位 置

伊吹町は滋賀県の北東部に位置し、町域の大部分を伊吹山地が占める。伊吹山地は滋賀と岐阜の県境をなし、県下最高峰の伊吹山（1,377 m）を南端にして北へと伸びる。町域は、南を山東町、西を東浅井郡浅井町、南東から東にかけては岐阜県不破郡関ヶ原町、揖斐郡春日村、北は同郡坂内村に接する。地形的には、町の北中部が姉川のつくる河谷部からなり、南部は伊吹山から流れ出る河川が形成する複合扇状地となっている。

高番遺跡は、町の南西部、伊吹山麓の弥高川扇状地の下縁部の集落・高番に所在する。遺跡は集落の南東に位置し、地目は宅地・畑地・水田である。「大澤」「溝越」「廣戸」「北出」「東出」などの小字名が残る。

■ 歴史的環境

高番集落と弥高川をはさんで南東に位置する杉沢は、明治時代から土器や石器の出土が知られており、昭和13年には京都大学による調査、昭和63年にはほ場整備事業に伴った発掘調査が実施され、合口甕棺をはじめ縄文時代晩期中心の遺物が出土している。その他、伊吹山麓の扇状地上には、上野・弥高・大清水・上平寺・村木などに縄文時代の遺跡の所在が知られている。

『改訂近江國坂田郡志』によると、高番遺跡からは^{フタキイシ}敲石・石鏃・石斧・石棒・^{マガタマ}勾玉などが出土したとある。勾玉は昭和12年に不時発見されたもので、縦2.8 cm、頭部最大幅1.7 cm、厚さ0.7 cmの硬玉製のもので縄文時代のもものとされている。その他の遺物については所在が明らかになっていない。さらに平成2年度中の分布調査の際に、遺跡範囲の北側でサヌカイト製の石鏃を1点表採した^①。

弥生時代、古墳時代以降の本町内における遺跡の分布は、調査のなされてないことから、未だ明らかにはなっておらず、平安時代以降の山岳仏教関係寺院遺跡や、中世の城館跡などが伊吹山中や丘陵部に所在しているのみで、これらの時期における平野部の遺跡の調査はこれからの課題である。

高番ならびに北隣の春照周辺は、律令制下の郷里制のもとで、坂田郡九郷のうちの山東町西部を中心にした大原郷に属し、平安時代には大原庄に属した。以後江戸時代まで、姉川水利に伴う井組（出雲井）や、山東町間田にある式内社岡神社を総社とすることなど大原庄十八郷とよばれる地域に所属する。

第3章 調査の経過

調査は、ほ場整備事業によって切土工事と排水路工事の計画される個所を対象として、平成2年度中に65カ所の試掘調査を実施し、その結果に伴い計画変更等の協議をし、工事によって影響の残る個所を発掘調査し、資料の記録保存化を図った。

調査区は集落から西の油里川へと傾斜しており、上手よりトレンチ1、トレンチ2、トレンチ3と分けた。現地における調査の方法は、0.4㎡級バックホーを用いた表土掘削の後、人力による遺構検出、遺構内掘削を行い、遺物の検出を行った後に写真撮影、平面図の作成等を行った。

第4章 調査の結果

調査の結果、明瞭な生活の痕跡を示す遺構は検出されなかった。しかしトレンチ1から3にかけて継続すると思われる落ちこみ状の遺構が各トレンチの南端にあり、そこからは弥生時代から平安時代に及ぶ遺物が、礫に混じり押しつぶされたような状態で出土した。

● トレンチ1

トレンチ1における土層の堆積は、南側が表土、茶褐色砂利土、黒灰色砂利土、暗茶褐色砂質土（礫を含む）の順に堆積しており、北側では約20cmの表土の下は砂利土が約20cm堆積し地山になる。検出した遺構は深さ約15cmの不正形の落ちこみSO1と、極めて浅いピットが7個あるのみで、それぞれの性格はわからない。また遺構面上には南北に石^{アンキ}暗渠、東西に松暗渠がかかる。両暗渠とも近代のものである。

出土遺物は土師器の細片が南側の暗茶色砂質土層中からわずかに出土したのと、SO1から須恵器片が1点出土した。

● トレンチ2

トレンチ2における土層の堆積は、表土、茶色粘質土であり、南側に幅約5mで上層が暗茶褐色砂質土（礫を含む）、下層が茶灰色砂礫土層の落ちこみ（SO2）が検出された。この落ちこみ層からは弥生時代から平安時代に至る遺物が出土した。茶色粘質土ならびに落ちこみ層を除去すると、トレンチ1同様に鉄気を多く含む青灰色の粘質土層があり、ピット、土壙が検出できた。以下検出遺構について簡単に概説してみたい。

SK1は南北幅約5m、深さ10cmほどの方形の土坑である。遺物は須恵器の塊がただ1点出土した。北西角より幅40cm深さ10～20cmの溝状構が北へ約6.5m伸びるが、その先は東西にはしる石暗渠により消える。

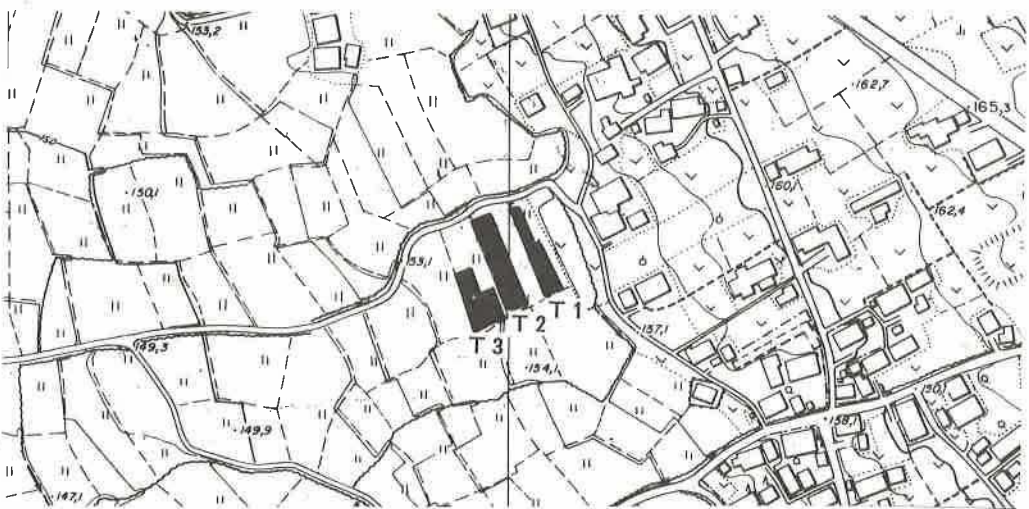
SO2は地表面50～60cm下にある暗茶褐色砂質土、茶灰色砂礫土層の落ちこみ状遺構で、トレンチの南端より幅約4～6m、地表面からの最深が1.0mを計る。暗茶褐色砂質土層が厚く、茶灰色砂礫土層は厚さ10cmほどである。この落ちこみ状遺構はトレンチ1の暗茶褐色砂質土ならびにトレンチ3の落ちこみ状遺構(SO3)に続くものである。

その他10基のピットを検出したがいずれも遺物の出土は無く、規則的に並ぶものではなかった。また、中央付近および北側で南北ならびに西へはしる石暗渠の一部を検出した。

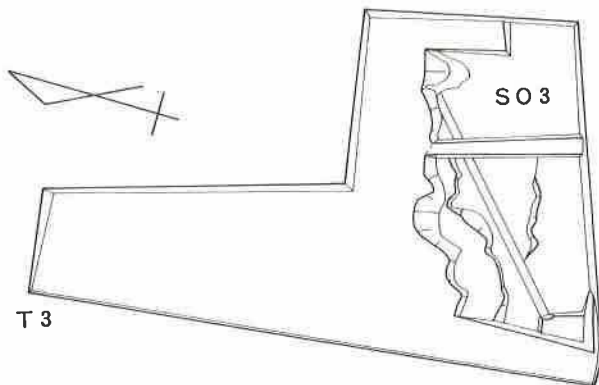
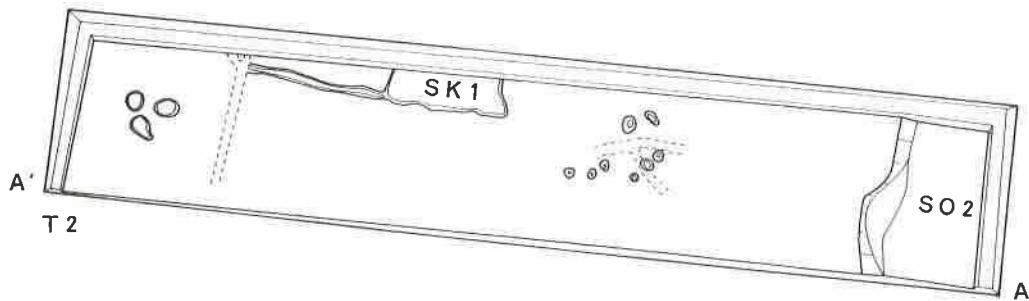
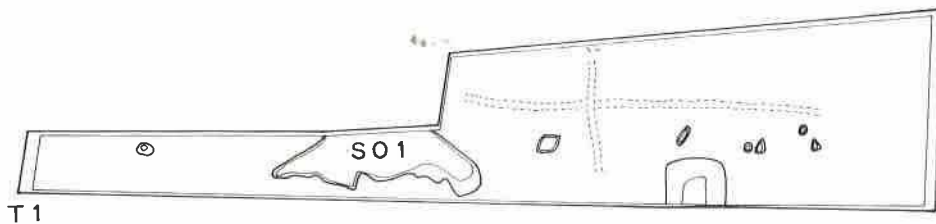
● トレンチ3

トレンチ3は約20cmの表土を除去すると、南側ではすぐに茶褐色砂質土層(礫を含む)が約6～8mの幅で表れた。これはトレンチ2から続く落ちこみ状遺構(SO3)で、茶褐色砂質土、黒茶色粘質土、黄褐色砂利土が堆積して遺構を形成していた。トレンチ3ではSO3以外は表土下がすぐ青灰色粘質土となり遺構は検出されなかった。

SO3は北から傾斜しながら南へと落ちこむ。最も深いところで約39cmを計る。遺構の北側では多くの土器が礫と入り混じった状態でまとまって出土する地点が数箇所あった。残念ながら遺構内の3層と出土遺物との関係は明確にはできなかった。遺構の東と西の端は石暗渠により既に攪乱されており、また遺構の北東隅から南西隅にかけて約50cmの幅で土管が埋め込まれていた。

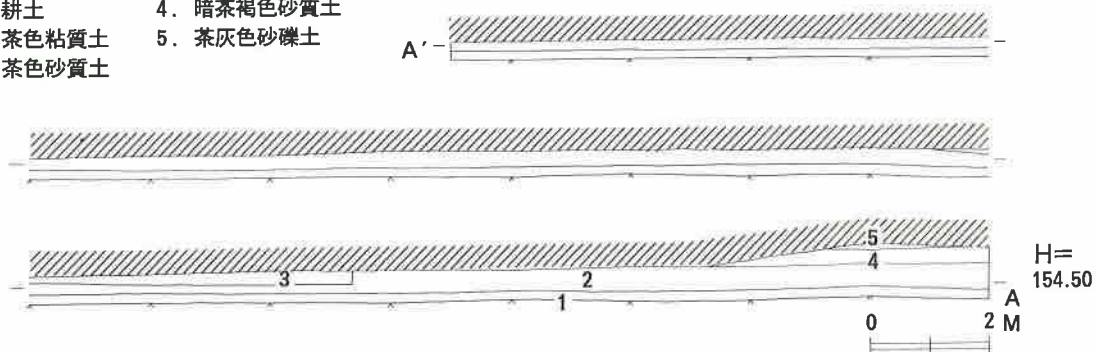


第3図 トレンチ配置図



第4図 検出遺構平面図

- 1. 耕土
- 2. 茶色粘質土
- 3. 茶色砂質土
- 4. 暗茶褐色砂質土
- 5. 茶灰色砂礫土



第5図 トレンチ2東壁土層断面図

第5章 出土遺物

今回の調査で出土した遺物について説明を加える。高番遺跡発掘調査で出土した遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗などの土器と鉄器である。出土した遺物のほとんどは、トレンチ2とトレンチ3の落ちこみから出土した。

第1節 土 器

出土した土器は、次の4つの時期に属すものと考えられる。Ⅰ. 弥生時代、Ⅱ. 古墳時代、Ⅲ. 奈良時代末期から平安時代初期のもの（土師器、須恵器のほとんど）、Ⅳ. 平安時代中期以降のもの（灰釉陶器のほとんど）。

(1) トレンチ2出土土器

SK1出土土器

SK1からは須恵器の壺（1）が1点出土している。体部が内彎気味に立ち上り、口縁部で外に開く。

SO2出土土器

トレンチ2出土土器のほとんどがSO2からの出土である。

弥生式土器

（2）は平底から内彎気味に立ち上がる胴部が、比較的下方で張りをもつタイプの壺である。弥生式土器は、わずかにこの1点のみである。

土師器

●皿（3～13）

土師器の皿には器高が1.4～2.0cmで比較的浅いもの（3～8）と、器高が2.3～2.8cmのやや深いもの（9～13）とがある。

（3）は短い体部が外に開き、口縁端部は断面方形を呈す。（4）は丸く納める。（5～7）は短い体部が内彎気味に立ち上がるもの、（8）は端部がさらに外へつまみ出されている。（9）は内彎気味に立ち上がる体部から口縁で屈曲し受け口状を呈する。（10～13）は外に開く体部をもつ。（12）は口縁部でさらに外反し、（13）にはその内面に沈線が施されている。皿類の口径は13.1～16.8cmを計る。

●坏（14～26）

（14～26）は土師器の坏で口径が11.4～14.7cm、器高2.5～4.0cmを計る。（14・15）

は体部が外に立ち上り、(16)は口縁外面に沈線をまわす。(17・18)は端部をさらに外へ引き出し、(18)は端で上方へ屈曲させている。(19)は口径が11.4cmと小型で、(20・21)とともに内彎して立ち上がる体部から口縁部が外反するものである。(25)は体部付け根で「く」の字に屈曲しており、高坏の可能性もある。(26)は平らな底部から屈曲して体部が立ち上がり他の坏と型式を異にする。

● 壙 (27・28)

(27)は半円形の貼り付け高台を持つ。成形が荒く高台の貼り付けが体部付け根まで被う。(28)は短い三日月形の高台を持つ、器面を横ナデで仕上げた上質の土師壙である。

● 甕 (29～32)

(29・30)は口径が13cm程度の小型の甕で、球形の体部をもつものであろう。両方とも頸部で「く」の字に屈曲し短い口縁がやや内彎して外に開く。(31・32)は口径が24.8・27.2cmの大型の甕で、口縁部は内彎して立ち上がり端部を外へつまみだす。端部上面は平らに納める。古墳時代(Ⅱ)に属するものであろう。

● 壺 (33・34)

壺の底部である。(33)は底部外回りに帯状に粘土を貼り付けている。

須 恵 器

● 皿 (35)

器高の低い皿で、底部にヘラ切り痕が残る。

● 坏 (36)

低くつぶれた貼り付け高台を有す。

● 壙 (37・38)

(37)は断面三角形の高台が「ハ」の字型に付く。(38)は三角形の低い高台が貼り付き、内彎して立ち上がる体部は口縁部下で薄くなり、逆に口縁端部では肉厚となって丸く納める。時期としてはⅣに属するものであると思われる。

● 甕 (39・40)

(39)は口縁を大きく外反させ端部で上方につまみだす。器面の調整は叩きのあとなどで消しをおこなっている。時期はⅡに属するものであろう。(40)は壺または甕の体部である。

● (63～81)

須恵器の甕または壺で(63～70)は内面の同心円文をなで消しており、時期はⅡに属するものであろう。(71～81)はなで消し作業を省略している。トレンチ3においても同

様の出土状況であった。

灰釉陶器

● 壙 (41~57)

(41・42) は灰釉壙の体部で、どちらも口縁端部で外反する。(41) は内面に (42) は内面と外面口縁部に釉が付着する。(43~57) はすべて底部であり高台を中心にみると次の3つのタイプに分けられる。

(43~47) は断面三日月形の比較的高い高台が「ハ」の字状に外に張って付くもの。(48~51) は断面台形のやや高い高台をもつもの。(52~56) は短い高台が付くものである。

(43) は底部内面にハケ (幅 4.25 cm) による釉の塗付けが認められることから、古いタイプのものであろう。また、底裏は比較的フラットな面で墨の付着が認められることから「転用硯」として使用されたものと考えられる。(46) は高台の外面取り付け部にヘラ状工具による押さえこみがみられる丁寧なつくりで、古いタイプのものであろう。底裏に糸切り痕が残る。(48・50) の底裏には回転糸切り痕が明瞭に残る。(52・55) は底部全面に釉が付着し三叉トチンの使用痕が残る。(56) は大きめの壙で体部の下方にはヘラによる削り、高台の付け根はなでによる調整と丁寧なつくりで古いタイプのものとも考えられる。内面全体に釉が付着し三叉トチンの使用痕が残る。

● 浄瓶 (58)

肩部から内傾してすぼまりながら立つ口頸部を持つ。残存する上端はやや外反しているが先は不明である。内外面ともなで調整で外面に釉が付着する。他の壺がすべて外反しているのに対し、これは先にいくにしたがってすぼまっており浄瓶であると考えられる。

● 壺 (59・62)

(59) は小型の壺の底部である。体部の付け根に段を有し体部が立ち上がる。底部内面に釉が付着し底裏に糸切り痕が残る。(62) は体部がやや内彎して立ち上がる大型の壺で、内面に釉が付着する。

● 瓶 (60・61)

(60) は長頸瓶の底部である。(61) は底部を欠いているもののほぼ完成の長頸瓶で、外面は肩部まで薄く釉がかかる。口頸部と肩部の接合は三段接合である。

(2) トレンチ 3 出土土器

● SO3 出土土器

トレンチ 3 出土土器のすべてが SO3 からの出土である。

土 師 器

● 皿 (82~93)

(82~88) は器高が浅いもの。(89・90) は器高がやや高い土師皿である。

(82・83) は体部が外に開き断面方形または丸く納める。(84・85) は外反して立ち上がる体部をもち、(86) は内彎して立ち上がる体部が口縁で外反するものである。(88) は口縁内部に沈線がまわる。(89) は体部が外反して立ち、(90・92) は内彎して立つ。

(93) は底部に脚部が付いた痕跡が残り台付き皿かと考えられる。

● 坏 (94~114)

(94~97) は体部が外に開き立ち上がるもの、(98) は体部が外反して立ち上がり、(99) は口縁端部でやや内彎する。(100) は逆に端部でさらに外反する。(101~106) は内彎する体部をもち、(101) は口径が 10.4 cm と小型の坏である。(103) は端部内面に沈線をもつ。(105) は口縁端部を外につまみ出す。(106) は口縁端部でやや受け口状となる。(107~110) は坏の底部であろう。(111・112) は断面方形の高台が付く。(113) は平らな底部から体部が屈曲して立ち上がるもので、底部の端に幅 0.6 cm の高台が付いていたことを示す痕跡を残す。(114) は体部が外に開く坏で、貼り付け高台を有していた痕跡には丁寧に刻み目を施している。

● 鉢 (115)

外に大きく開く体部を持ち、口縁端部で薄くなり受け口状に外に開く。

● 蓋 (116~118)

(116・117) は擬宝珠様つまみで、(116) は天井部が凹み、(117) は扁平で中央がやや突出した形態を呈する。(118) はゆるやかに内彎しながら下垂し端部にわずかに段をもつ蓋で宝珠を欠く。

● 甕 (119~124)

口径が 12.0~15.2 cm の小型の甕で、球形の体部をもつものであろう。(119) は頸部で大きく外へ開き口縁端部が上方へ引き上げられる。(120・121、124) は口縁部が外に開き立ち、(122・123) は口縁端部が内彎して立ち上がる形態をもつ。

● 壺 (125~127)

(125) は壺の口辺部と考えられる。外に大きく開き、口縁端部で下方に屈曲する。端部上面に帯が貼り付く。(126~127) は壺の底部と考えられる。

須 恵 器

● 蓋 (128・129)

(128) はゆるやかに内彎しながら下垂し端部でわずかに屈曲する。内面にかえしはない。(129) ゆるやかに内彎して下垂する、端部を下に長く屈曲させ天井に平らな宝珠が

つく。

● 皿 (130)

平らな底部に断面方形の高台がつく須恵器の皿である。

● 坏 (131~140)

(131~133) は高台の付かない坏身で、(131・132) は体部が内彎して立ち上がり、(133) は中央の盛り上がった底部から体部が屈曲し外に開いて立ち上がる。(134・135、137~139) は底部が外に開き立ち上がり、断面台形の高台を貼り付ける。(140) は断面三角形の低い高台が付く。

● 壙 (141)

体部はゆるやかに内彎しながら立ち上がり端部を外に開く。端部断面は丸く納める。

灰釉陶器

● 壙 (142~143)

(142) は灰釉壙の体部で内彎しながら立ち上がり端部で外に開く。内面に釉が付着する。(143~146) は底部であり高台を中心に3つのタイプに分けられる。(143) は壙としては小型で、断面三日月形の比較的高い高台がやや外に張って付く。(144) は断面台形の高台が付き、裏底には糸切り痕が残る。(145~146) は短い高台が付くものである。

● 皿 (147・148)

(147) は皿で、体部がゆるい角度でやや内彎気味に開き端部で外につまみ出している。断面方形の短い高台が貼り付く。内面全面に釉が付着する。(148) は内面の底部と体部の境に段をもつ段皿で、体部はゆるい角度で外に開き口縁部でやや外反して尖り気味に納める。内面全面に釉が付着する。

● 盤 (149)

東海系の特徴をもつもので、他の灰釉陶器よりは時期的に古く9世紀頃のものであろう。盤部は高台付け根よりゆるい角度で横にのびた後、外反しながら斜め上方へ立ち上がり、外に開く長い高台が付く。

● 瓶 (150~156)

(150~153) は長頸瓶の口頸部で肩部から直立し口縁部で外折して、端部を上につまみ出して平らな縁帯をつくりだす。外面には上下帯状に濃い釉が付着し内部は薄く点状に釉が付着する。(154・155) はおそらく長頸瓶のものであろう。(154) は卵型にふくらむ体部で肩に釉がかかる。「ハ」の字状に開き内面と底のくぼんだ貼り付け高台をもつ。調整は体部に筒削りの痕が残る、底裏には静止糸切り痕が残る。(155) は(154) に比べ

大きめの壺で、断面台形の高台が貼り付く。底部内面には渦巻状の回転箇削りの痕が残る。(156)は瓶の体部で直立した長い高台が付く。

山茶碗 (157・158)

断面三角形の高台が付く山茶碗で、(157)は底裏に糸切り痕が残る。(158)は底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。

第2節 金 属 器 (159)

トレンチ3からは、刀子と思われる金属器が出土した。

現存長8.4cm、幅2.2cmで先の部分が欠けている。中茎は長方形で、腐食が酷いがしのぎの部分と刃部を形成しているのが確認できる。

第5章 ま と め

■ 試掘調査について

今回の調査では高番集落の西に広がる水田に65カ所にのぼる試掘トレンチを設定した。小字でいうと南から「大澤」「溝越」「廣戸」「縄手」に該当する。そのうち多量の遺物が出土したのは、「縄手」の集落付近のみであった。

他の地区の概要は以下のとおりで、約20～25cmの表土を除くと、弥高川に近い「大澤」においては、集落に近い上手で茶系色の砂礫土が約30～60cm堆積していた。しかし、油里川沿いの下手では表土の下は茶系色あるいは青灰色の分厚い粘土層になった。「溝越」や「廣戸」においても比較的浅い表土の下に、砂質土をはさんで砂礫土が約20～30cm堆積しており、おそらく弥高川のものと思われる石や砂が検出された。これらは伊吹山南麓の扇状地を直線状にかけくだる弥高川が、繰り返しておこした氾濫の結果であろう。また、試掘トレンチの26カ所で石暗渠を、3カ所で松暗渠を確認した。石暗渠は深さ40～50cmのところ設置されており、拳大の石と頭大の石が組合わされていた。主線は幅約40cm×深さ約40cmあり、支線はその半分の規模であった。

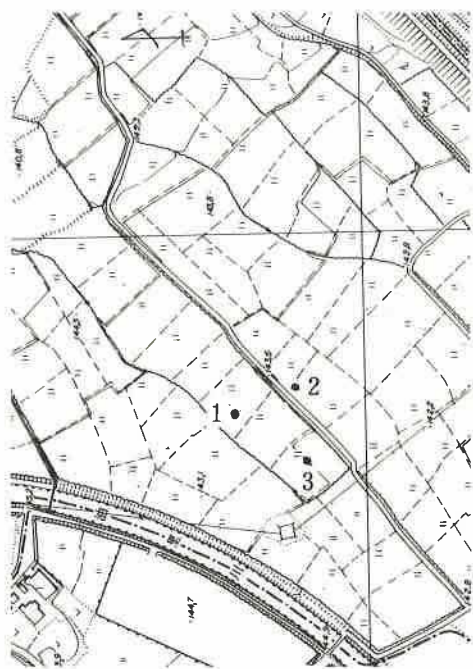
■ ミシマサンについて

「大澤」の油里川に近い水田内には、地元で「ミシマサン」と呼ばれている塚状のもの

があった。一辺約 20 m 前後の三角形をなす頂点に位置しており、仮に北の塚を (1)、東を (2)、西を (3) としてその概要をここに記録しておく。(1) は水田中に約 120 × 75 cm、高さ約 40 cm の島状で残っていた。その中心部を丁寧に除去すると、表面下約 10 cm のところで茶碗片が出土し、木の根が検出された。その他に遺構はなかった。(2) は水田のコーナーにあり、そこだけ約 80 cm 四方の畦として残されてあった。外見は周りの畦と変わりはないが、約 60 年前までは直径 40 cm 程の木が生えていたようで、ここからも茶碗片と木根が検出された。(3) は畦から約 3 m 水田に出っ張った半円形の塚で、その中央に木が生えており、塚の縁を幅 30 cm の水路がめぐっていた。土盛りはなく、地表約 10 cm

下から (1) (2) と同様に茶碗片が出土した。

この 3 つの塚については、ただ地元でミシマサンと呼び慣わされていたのみで確かな言い伝えはなかった。今回の試掘調査では、過去に 3 カ所とも木が生えていたことが確認でき、3 カ所から同じような茶碗片が出土したことから、近代になって祀られたものではないだろうか。今回の調査ではその性格を明らかにすることは出来なかったが、この地方で「野神」と呼ばれているものに類するものかもしれない。



第 6 図 ミシマサン位置図



写真 1 ミシマサン (2)



写真 2 ミシマサン (3)

■ 調査のまとめ

今回の調査で気付いたことなどを調査のまとめとして述べてみたい。

従来伊吹町内では、縄文時代の遺跡に関しては中期～晩期に至る井の田遺跡、杉沢遺跡など、伊吹山南麓を中心にその所在が知られていた。しかし弥生時代以降の遺跡については、山岳寺院跡と中世城館を除いてはほとんど解明されていなかった。しかし、今回の調査で、はからずも弥生から平安時代中頃にかけての土器が出土したことは、町内において空白に近い状態であった弥生時代以降の実態を、土器を媒体にしてわずかではあるが埋めるものとなった。ただし、遺跡の性格を明らかにするような遺構は検出しておらず、高番遺跡が町内の遺跡群の中でどのような位置にあるのかを解明することが今後必要となってくるであろう。

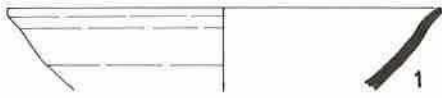
次に土器の出土状況であるが、ほとんどがトレンチ2と3にまたがる茶褐色砂質土の落ちこみ状遺構（SO2、SO3）から出土しており、縁に多く中央に少なく堆積した状態で検出された。特に縁のところでは土器と礫が混在しあって出土しており、土師器の多くは細片となっていた。おそらくこれらの土器は扇状地の上手から砂礫と共に流されてここに堆積したものと思われる。しかし土器片に摩耗はみとめられず、運ばれた距離はそう長くないであろう。さらに、縄手の東で上手にあたる字「千万歳」の畑地で土師器片や須恵器片を表採していることから、今回の調査区の上手にこれらの土器を使用した人々が営んだ生活の遺跡が所在するものと考えられる。

出土した土器には、弥生式土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗があり、時期的には弥生時代・古墳時代・奈良時代末期から平安時代初期・平安時代中頃の4時期が考えられた。弥生時代・古墳時代の遺物は少ないが、平安時代中頃の灰釉陶器は愛知県の猿投か美濃産のものであり、東海系のものが多く含まれる。列島の東西を分かち伊吹山地と霊仙山系の山狭部から、西への出口に当たるこの地域で出土したことは必然のことであろう。

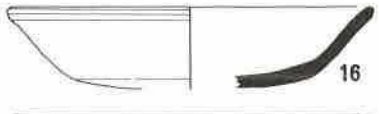
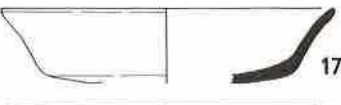
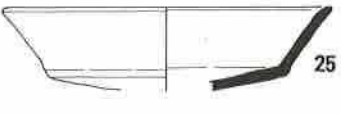
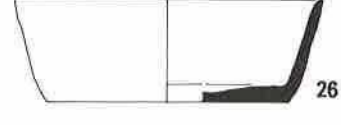
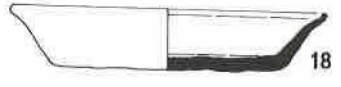
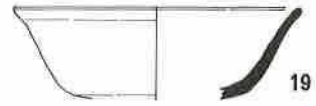
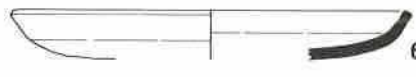
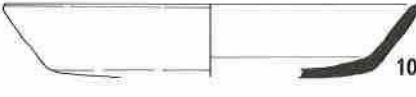
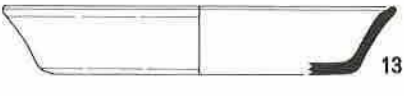
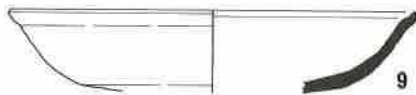
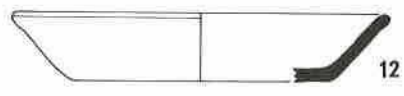
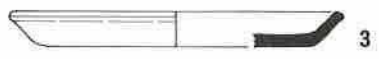
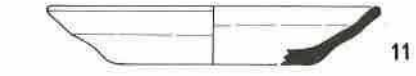
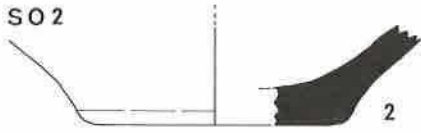
また、出土した土器の中には丁寧に調整を施された上質の土師碗や、灰釉碗の底裏に墨が付着した転用碗と考えられる土器があり、さらに仏器として利用される浄瓶などが出土していることから、今回出土した土器が元々所属していた遺跡は、単に一般的な集落跡ではなく富農層や寺院などに関係するものである可能性も考えられる。

以上極めて限られた整理期間であったので十分な考察も加えられないまま、本報告書を作成した。今回の調査を手始めとして、伊吹山南麓に広がる扇状地上の考古学的解明を進めていく所存でいるので、ご容赦願いたい。

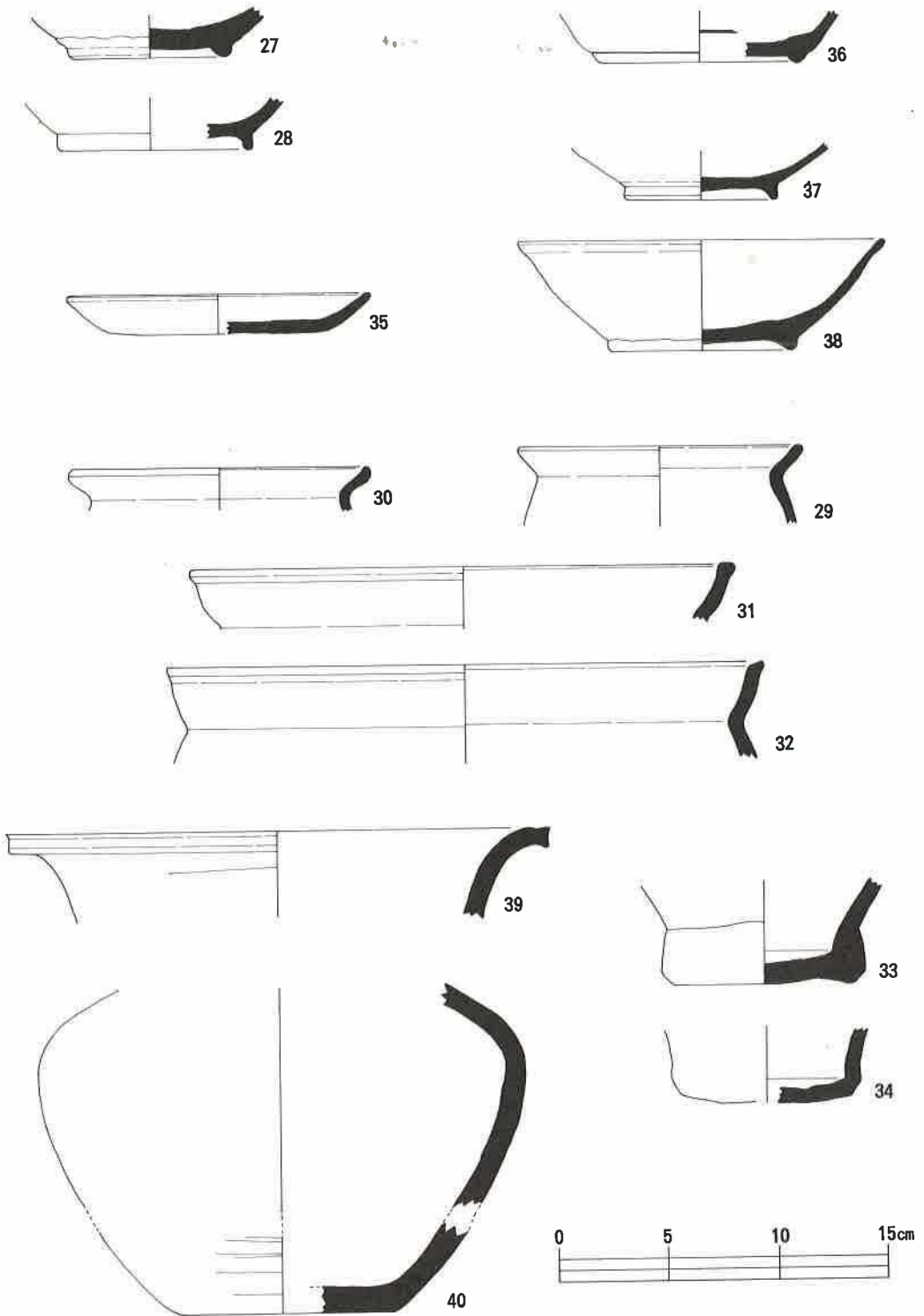
SK 1



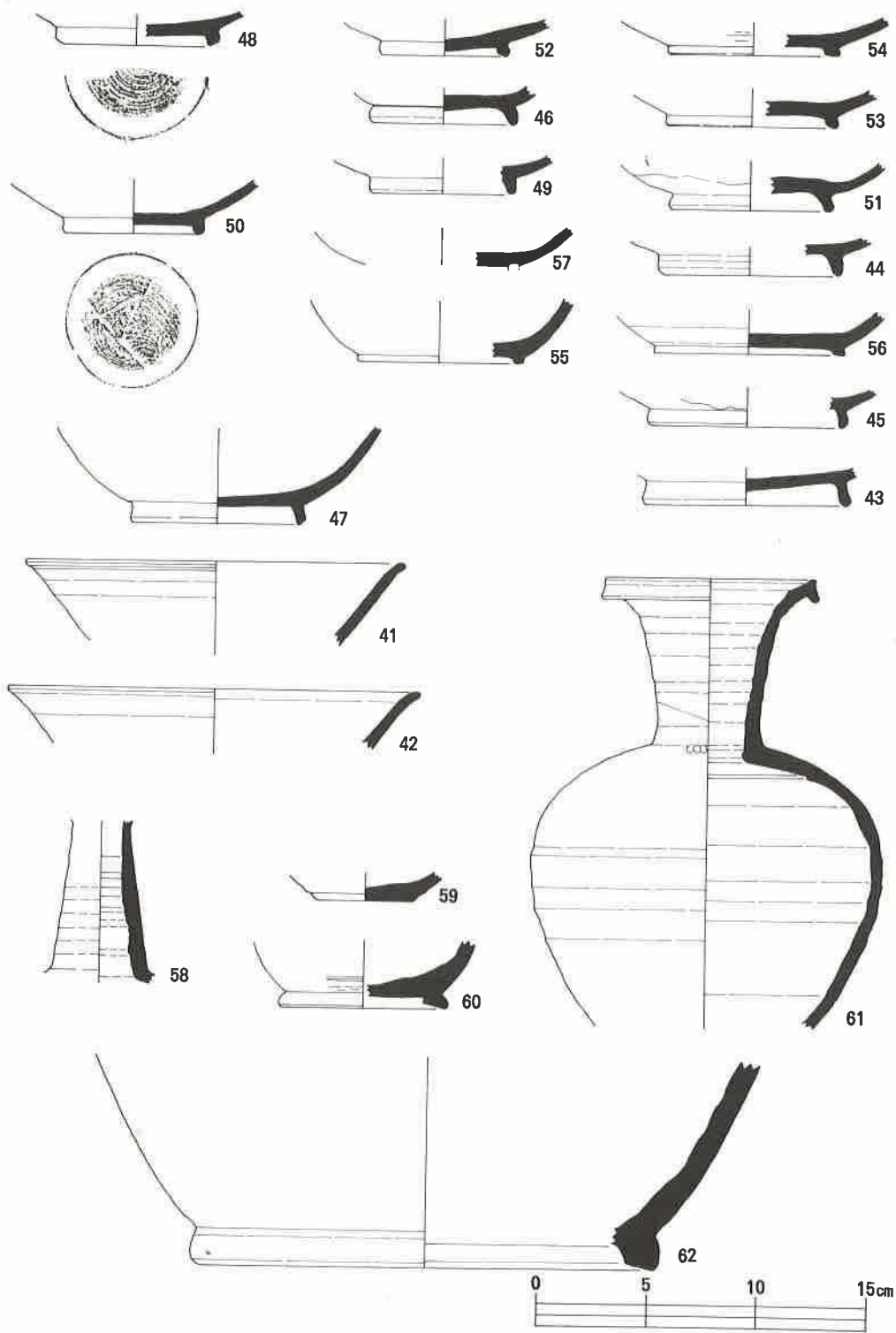
SO 2



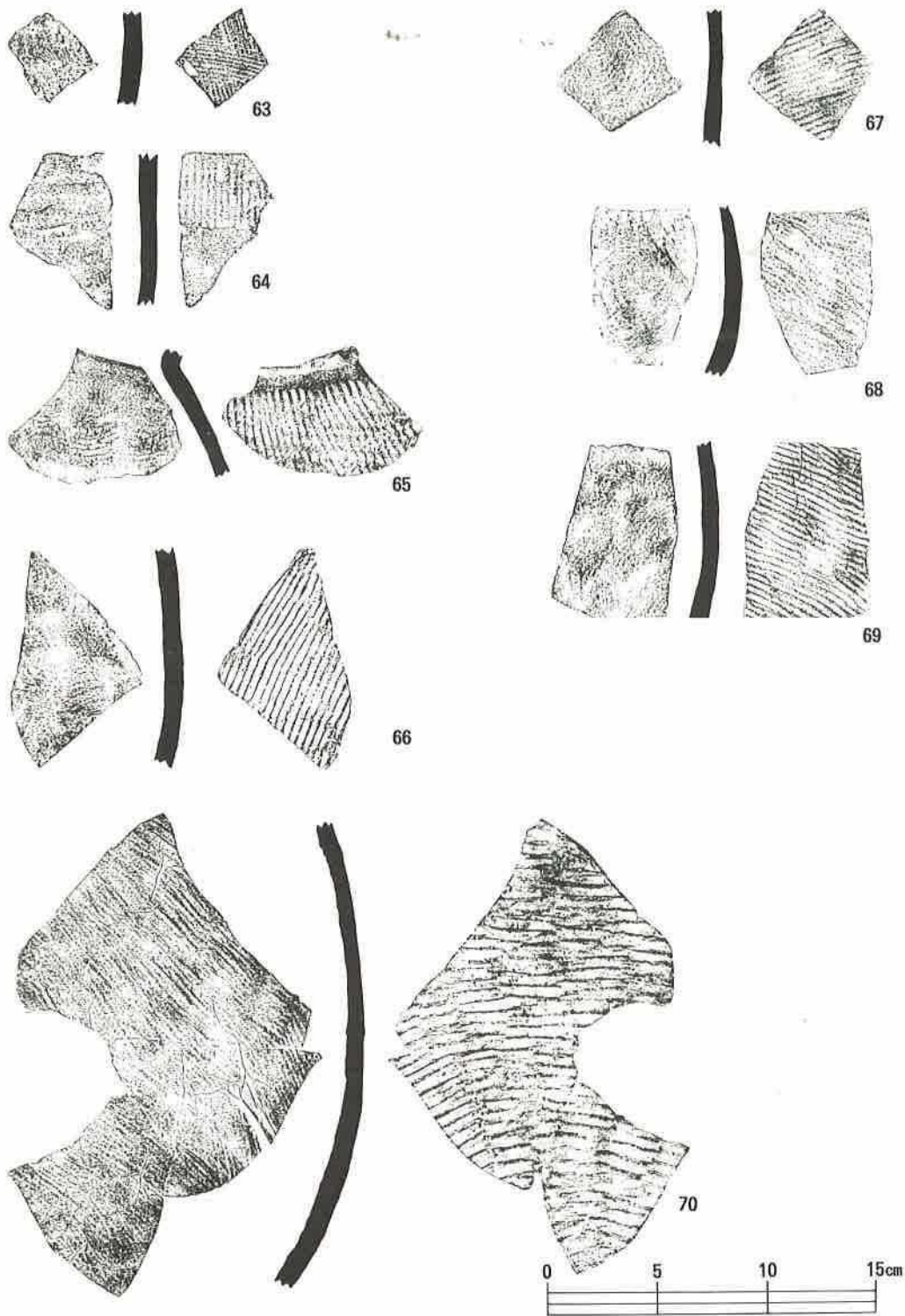
第7図 出土遺物(トレンチ2 SK1・SO2①)



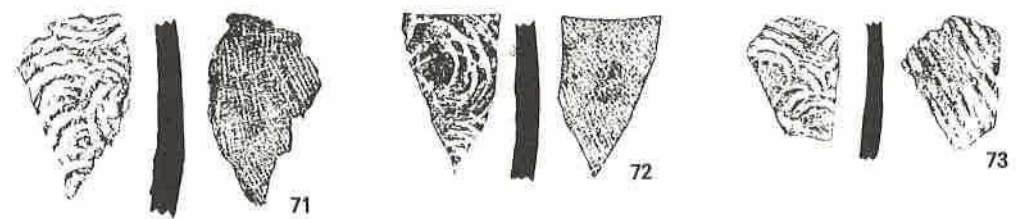
第8図 出土遺物（トレンチ2 SO2②）



第9図 出土遺物（トレンチ2 SO2③）



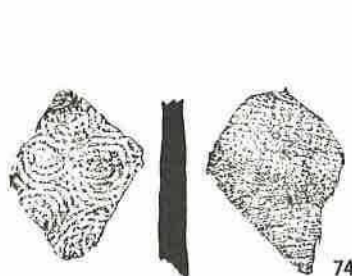
第10図 出土遺物 (トレンチ2 SO2④)



71

72

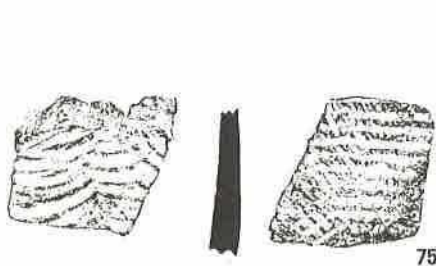
73



74



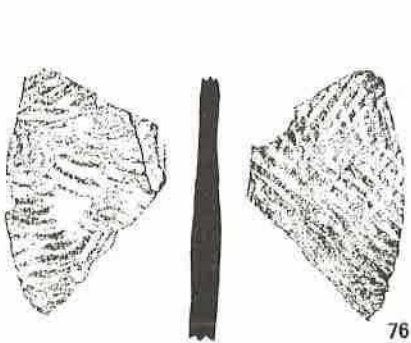
78



75



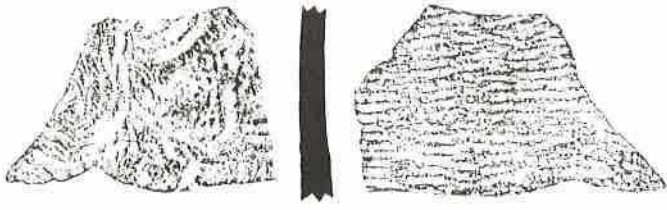
79



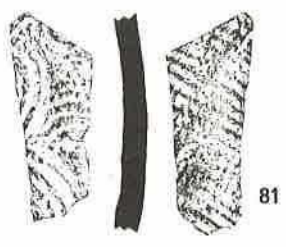
76



80



77

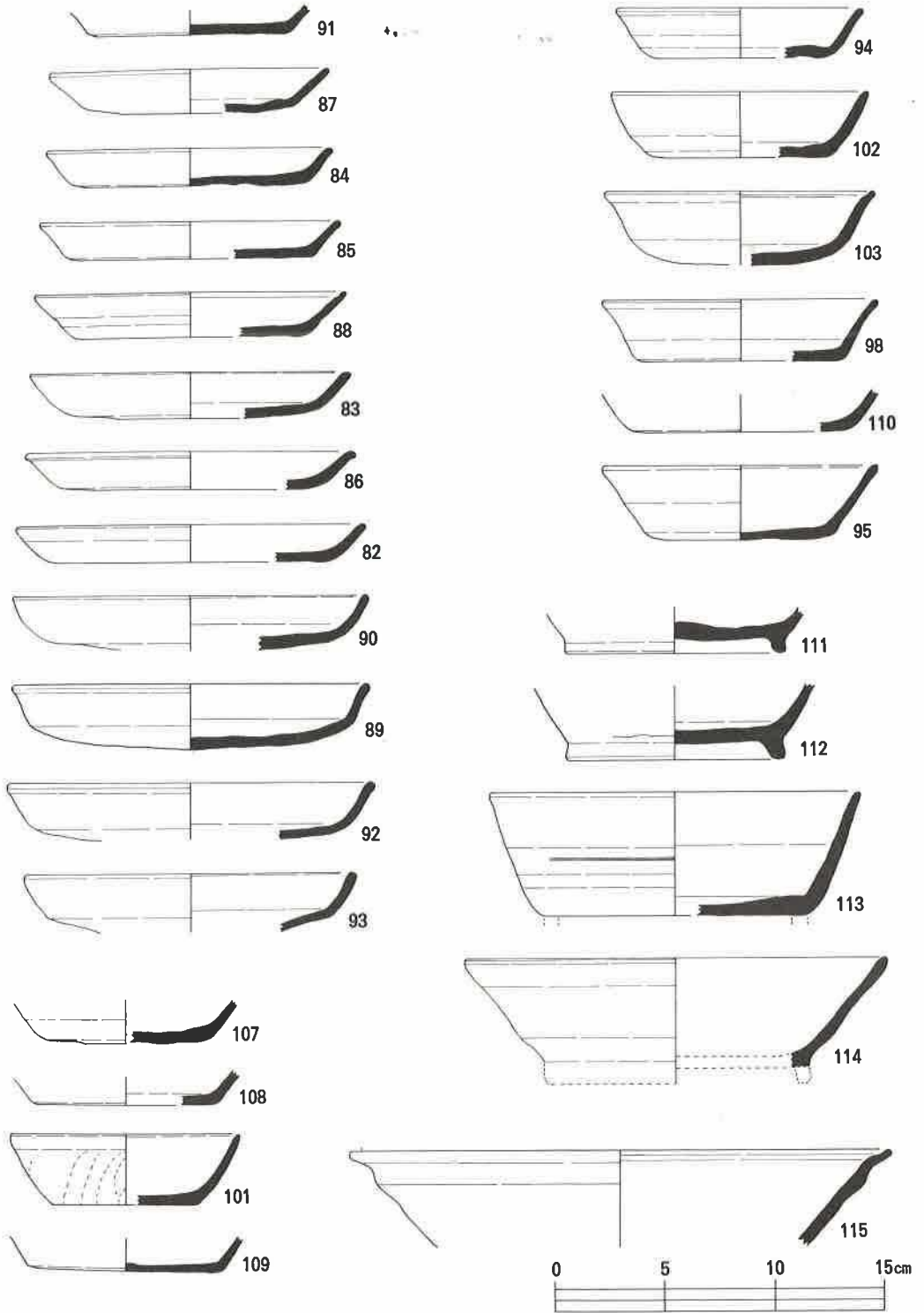


81

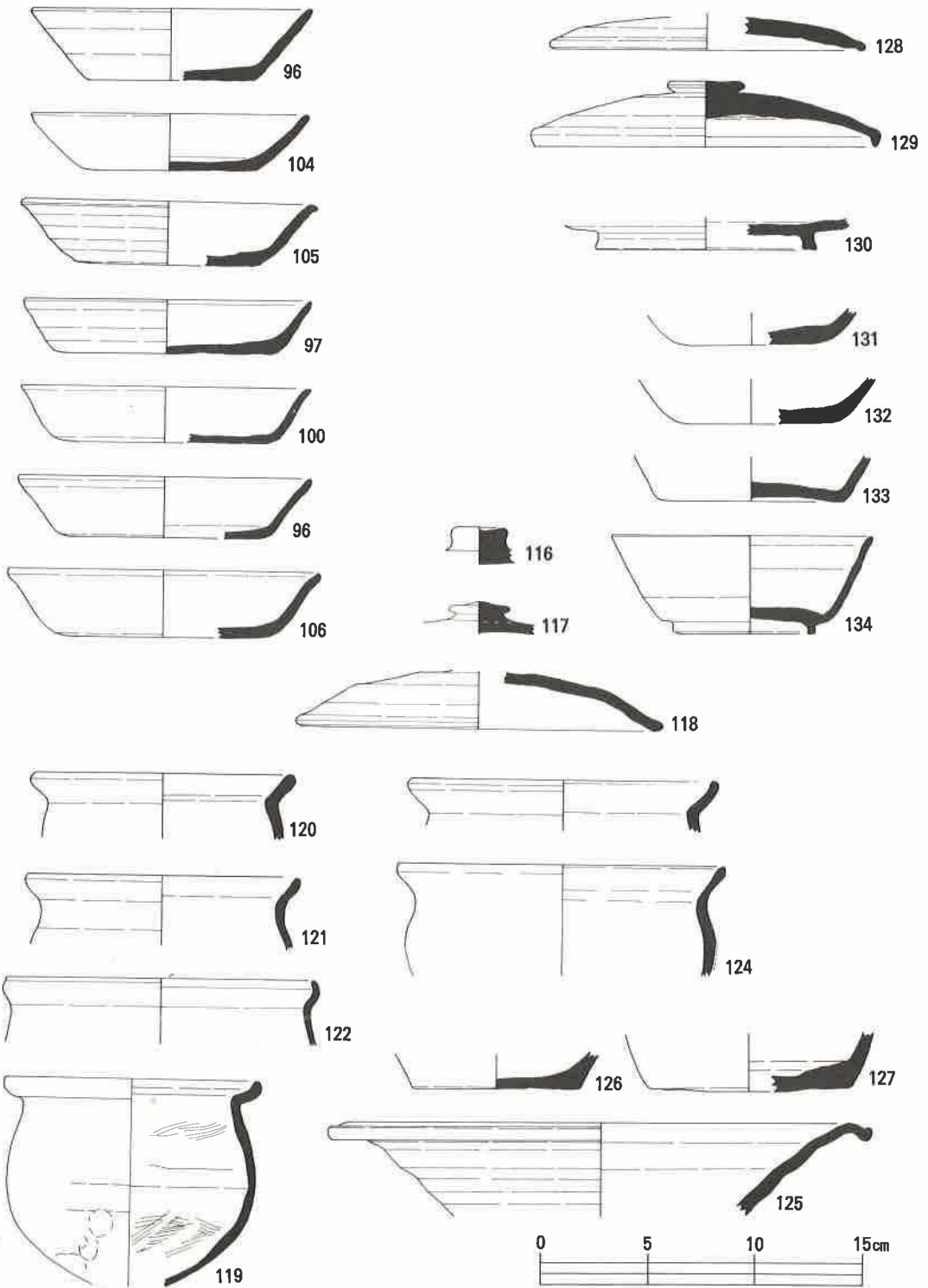


第11図 出土遺物 (トレンチ2 SO2⑤)

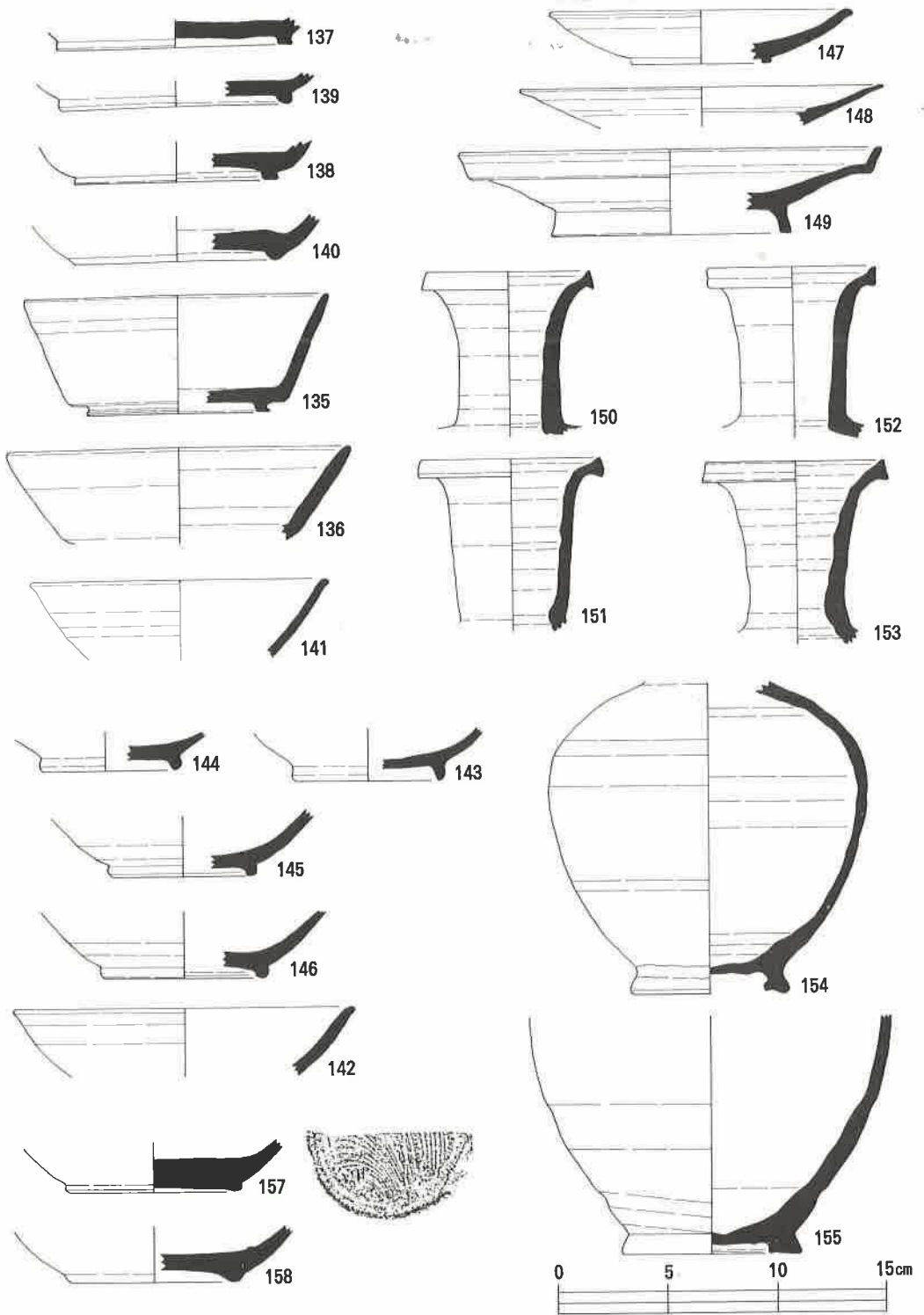
SO3



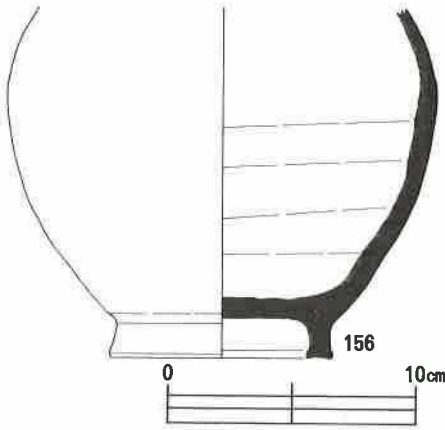
第12図 出土遺物（トレンチ3 SO3①）



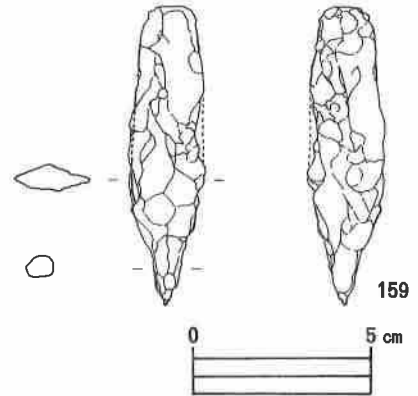
第13図 出土遺物（トレンチ3 SO3②）



第14図 出土遺物（トレンチ3 SO3㉓）



第15図 出土遺物 (トレンチ3 SO3③)



第16図 出土遺物 (金属器)

出土遺物観察表

トレンチ2 SK1

(備考欄は上から胎土・焼成・色調)

番号	器種	器形	法量 (cm)	形態	手法	備考
1	須恵器	壺	口径 17.5	体部ははじめ内彎気味に立ち上り、中ほどで外にやや開き口縁にいたる。端部はやや尖る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 青灰色

トレンチ2 SO2 (弥生土器)

番号	器種	器形	法量 (cm)	形態	手法	備考
2	弥生土器	壺	底径 10.6	平らな底部から、内彎気味に立ち上り、外へ強く張る。胴部のふくらみが下にある壺であろう。	外面は刷毛後ナデ調整 内面はナデ	良 (小石多く含む) 良好 薄茶褐色

トレンチ2 SO2 (土師器)

番号	器種	器形	法量 (cm)	形態	手法	備考
3	土師器	皿	口径 13.1 底径 11.0 高器 1.4	平らな底部から、外へ開き立ち上る、口縁部は断面方形を呈す。	横ナデ	良 やや甘い 淡朱色

4	土師器	皿	口径 15.6 底径 6.8 器高 2.0	平らな底部から外へ開き立ち上る、端部は丸い。	・外面とも横ナデ	良 甘い 茶褐色
5	土師器	皿	口径 15.9 底径 12.3 器高 1.8	平らな底部から内彎気味に体部が立ち上がる。端部は断面方形を呈す。	内・外面とも横ナデ	良 甘い 淡朱色
6	土師器	皿	口径 16.2 底径 9.0 器高 2.0	底部から内彎気味に体部が立ち上る、端部は断面方形を呈す。	内・外面とも横ナデ	良 甘い 朱色
7	土師器	皿	口径 16.2 底径 13.6 器高 2.5	丸い底部から、内彎気味に体部が立ち上る、口縁先端は平らにおさめる。	内・外面とも横ナデ	良好 良 淡赤茶褐色
8	土師器	皿	口径 15.8 底径 12.5 器高 1.4	平らな底部から、内彎して立ち上る、口縁部でさらに外に開き端部は丸い。	磨滅していてわかりにくい横ナデ	良 やや甘い 淡朱色
9	土師器	皿	口径 16.5 底径 10.6	体部はやや内彎気味に立ち上る、口縁端部は外に開き「く」の字となる。	内・外面とも不十分な横ナデ	良 甘い 灰茶褐色 (外面にスス附着)
10	土師器	皿	口径 16.8	体部は外へ開き立ち上る、口縁端部は丸い。	内・外面とも横ナデ	良 甘い 茶褐色(表面剥離)
11	土師器	皿	口径 13.3 底径 8.0 器高 2.3	体部ははじめ内彎気味に立ち上るが、中程で外に開く、端部は丸めにおさめる。	内・外面とも横ナデ	良好 良 淡朱色
12	土師器	皿	口径 15.2 底径 10.4 器高 2.7	体部は外へ開き立ち上る、口縁端部も外に開き、丸くおさめる。	内・外面とも横ナデ	良 (1.5mm大の小石) 甘い 白茶褐色
13	土師器	皿	口径 15.6 底径 12.3 器高 2.8	体部は外へ開き、口縁端部は尖り気味におさめる、口縁内面に沈線を有す。	磨滅が激しい。体部外面は横ナデ。内面に成形時のキズあり。	不良 (1.5mm大砂粒含) 甘い 白茶褐色

14	土師器	坏	口径 12.8 底径 9.0 器高 3.4	底部は丸い。体部は外へ開き立ち上る。口縁部は尖り気味におさめる。	内・外面とも横ナデ、底部の成形に回転ヘラ切痕のこる。	やや不良 (1mm大小石) 甘い 外: 赤茶褐色 内: 灰茶褐色
15	土師器	坏	口径 14.3 底径 10.0 器高 3.2	体部は外へ開き立ち上る、端部は丸い。	磨耗ひどく不明、凸凹多い。	不良 甘い 茶灰色
16	土師器	坏	口径 14.7 底径 6.0	体部は外へ立ち上る。口縁端部は尖り気味におさめる、口縁外面に沈線を有す。	内・外面とも横ナデ、底部に回転ヘラ切りの痕。	良 不良 灰茶褐色
17	土師器	坏	口径 13.4 底径 10.0	体部は外へ開き立ち上り、端部に至る。	内・外面とも横ナデ、底部の成形が雑	やや不良 甘い 淡灰茶褐色
18	土師器	坏	口径 12.8 底径 9.0 器高 2.5	体部は外へ開き、口縁端部で「く」の字に内彎する。端部は断面方形。	内・外面とも横ナデ	良好 良 薄茶色
19	土師器	坏	口径 11.4 底径 7.0 器高 3.7	体部はやや内彎気味に立ち上り、口縁端部でゆるく外に開く、端部は尖り気味におさめる。	内・外面とも横ナデ、内面はていねいな仕上げ。	良好 良 赤茶褐色
20	土師器	坏	口径 12.8 底径 8.0 器高 3.2	体部はやや内彎して立ち上り、口縁端部で外に開く。端部は尖り気味におさめる。	内・外面とも横ナデ	良好 良 薄茶色
21	土師器	坏	口径 14.3 底径 10.6 器高 3.5	体部はやや内彎して立ち上り、口縁端部で外に開く、端は尖り気味におさめる。	内・外面とも横ナデ	良好 良 赤茶褐色
22	土師器	坏	底径 8.1	平らな底部から直立気味に立ち上った後、すぐ外に開く。	内・外面とも横ナデ	良 甘い 灰茶褐色
23	土師器	坏	底径 9.0	平らな底部から、体部は外に開いて立ち上る、口縁は不明。	体部は横ナデ、底部にヘラ切りの痕残る。	不良 やや甘い 淡灰茶褐色
24	土師器	坏	底径 9.4	平らな底部からやや内彎気味に立ち上る、口縁は不明。	内・外面とも横ナデ、底部にヘラ切りの痕残る。	不良 甘い 淡灰茶褐色

25	土師器	坏	口径 13.2	体部の付け根で「く」の字形に屈曲した後外に開く、端部は尖っている。高坏かもしれない。	内・外面とも横ナデ	良 良 茶褐色
26	土師器	坏	口径 12.4 底径 9.8 器高 4.0	底部は平底、体部はやや外へ立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良好 良 薄茶色
27	土師器	埴	底径 7.0	貼り付け高台をもつ、体部は外へ開き立ち上る。	磨耗ひどい、内面・外面とも不整形で指頭圧痕が残る、高台の貼り付け痕が体部下まで及ぶ。	良 甘い 薄茶褐色
28	土師器	埴	底径 8.7	貼り付け高台を有す。体部は外へ内彎気味に開く。	磨減しているが外面は横ナデ	良 甘い 淡朱色
29	土師器	甕	口径 13.0	口縁部は頸部で「く」の字に屈曲し、やや内彎して外に開く。	内・外面とも横ナデ	不良 良 灰茶褐色 (スス附着)
30	土師器	甕	口径 13.4	口縁部は頸部で屈曲し、端部に至ってやや直立する。	内・外面とも横ナデ	良 良 外：朱茶褐色 内：薄茶褐色 (スス附着)
31	土師器	甕	口径 24.8	口縁部は内彎気味に立ち上り端部は外方へつまみ出す。断面方形を呈す。	外面はへら削り後、横ナデ調整。内面は横ナデ。	良 良 灰茶褐色
32	土師器	甕	口径 27.2	口縁部は内彎気味に立ち上り端部は外方へつまみ出す。	内・外面とも横ナデ	良 良 薄茶褐色
33	土師器	壺	底径 8.0	底部より「く」の字形に外に立ち上る。	体部は内・外面とも横ナデ、内面にへら削り痕残る。底部は内面・外面とも成形不十分で外側にはりつけ有り。	良 甘い 外：灰茶褐色 内：淡朱茶褐色
34	土師器	壺	底径 8.7	底部より内彎気味に外へ立ち上る底部を持つ。	内・外面とも横ナデ	良好 甘い 淡朱茶褐色

トレンチ2 SO2 (須恵器)

番号	器種	器形	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
35	須恵器	皿	口径 13.8 底径 10.0 器高 1.8	平らな底部から、体部が外に開いて立ち上る。	体部内面はナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラ切後不十分なナデ。	不良 良好 暗灰色
36	須恵器	坏	高台径 9.0	貼り付け高台を有す、高台は丸くつぶれている、体部は外に開く。	内・外面とも横ナデ、高台の貼り付け部にヘラおさえの痕。	良 やや甘い 茶白灰色
37	須恵器	埴	高台径 6.8	平らな底部から体部がやや内彎して外に開く。断面三日月形の高台がつく。	内・外面とも横ナデ	良好 良 青灰色
38	須恵器	埴	口径 16.6 底径 8.2 器高 5.0	体部はなめらかに内彎しながら立ち上り、口縁下部に至り薄くなり口縁部で肉厚となる。	内・外面とも横ナデ	不良(砂混じり) 良 淡灰褐色
39	須恵器	甕	口径 24.8	口縁端部を上下へつまみ出す。断面方形	内・外面ともタタキの後、ナデ消し。	不良 良 灰褐色
40	須恵器	壺	底径 8.9	平らな底部から、体部がやや内彎して立ち上る、肩部で大きく屈曲する。	内・外面ともケズリ後、ナデ。	不良 不良 白灰色

トレンチ2 SO2 (灰釉陶器)

番号	器種	器形	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
41	灰釉	埴	口径 17.2	体部はやや内彎して立ち上り、口縁は外に開き丸くおさめる。	内・外面とも横ナデ、内面に釉附着。	良好 良好 薄茶色
42	灰釉	埴	口径 18.8	口縁は外へ開き丸くおさめる。	内・外面とも横ナデ、外面口縁部に釉が附着、内面一面に釉附着。	良 良好 外：明白灰色 内：灰色
43	灰釉	埴	高台径 9.6	断面三日月形の高台が付く、転用碗と考えられる。	内・外面ともナデ、内面にハケ(幅 4.25cm)による釉かかる。	良好 良好 茶褐色

44	灰 釉	堉	高台径 8.0	断面三日月形の高台が付く。	内・外面とも横ナデ、内面の体部側に釉付着。	良 良好 薄青灰色
45	灰 釉	堉	高台径 8.4	断面三日月形の高台が付く。	内・外面ともナデ、体部の内外面に釉付着。	良 良好 灰色
46	灰 釉	堉	高台径 6.4	断面三日月形の高台が付く。	底部にヘラ状工具による渦巻痕、体部に釉付着、高台外面取り付け部に押え込んだ痕。	良 (1.5mm大の小砂) 良好 薄茶灰色
47	灰 釉	堉	底径 9.6	体部はなめらかに内彎しながら立ち上る。断面長方形の高台が付く。	外面ナデ調整、内面は底部以外に釉付着。	良 良好 灰色
48	灰 釉	堉	高台径 6.6	丸い底部から体部がゆるやかに外に開く、断面方形の高台が付く。	内・外面ともナデ、底部に糸切り痕残る。	良 やや甘い 薄茶褐色
49	灰 釉	堉	高台径 6.4	断面三日月形の高台が付く。	内・外面とも横ナデ、内面に微量の釉付着。	不良 良好 灰色
50	灰 釉	堉	高台径 6.0	平らな底部から体部がやや内彎気味に立ち上る、断面丸い高台が付く。	内・外面ともナデ、底部に糸切り痕残る。	良 良 灰色
51	灰 釉	堉	高台径 7.4	体部やや内彎気味に立ち上る。断面三日月形の高台が付く。	内・外面とも横ナデ、底部外面にヘラ痕残る、内面全体と体部上方に釉付着。	良 良好 灰白色
52	灰 釉	堉	高台径 5.6	丸い底部から体部がゆるやかに外に開いて立ち上る、断面方形の高台を持つ。	内・外面全体に釉付着、底部内面に三叉トチン使用痕残る。	良好 良好 灰色
53	灰 釉	堉	高台径 7.6	平らな底部から体部がゆるやかに外へ開く。断面方形の高台が付く。	内・外面ともナデ、内面全体に釉が付着。	良好 良好 暗灰色
54	灰 釉	堉	高台径 7.9	平らな底部から体部が大きく外へ開く。断面方形の高台が付く。	内・外面ともナデ。内面にうすく釉付着。	良好 良好 灰白色

55	灰釉	壺	高台径 7.6	体部が内彎気味に立ち上る。断面方形の短い高台が付く。	内・外面ともナデ、内面全体に釉が付着。底部内面に三叉トチン使用痕。	良好 良好 白灰色
56	灰釉	壺	高台径 8.8	平らな底部から体部が外に開いて立ち上る、断面方形の高台が付く。	底部はヘラ削り痕。内面全体に釉付着。三叉トチン使用痕。高台外面ナデ痕、体部下部はヘラけずり。	良 やや甘い 薄茶褐色
57	灰釉	壺		平らな底部から体部が外に開いて立ち上る。	外面ナデ調整、内面に一部釉付着。	良 良好 暗灰色
58	灰釉	浄瓶		肩部から内側へ直立する口頸部を持つ、口縁端部ならびに胴部は欠損している。	外面はナデ、外面に釉付着。	良 良好 内：薄茶褐色 外：薄緑色
59	灰釉	壺	高台径 4.4	体部の立ち上りに一段を有す。	内・外面ともナデ、底部に糸切の痕、内面上部に釉付着。	不良 良好 灰白色
60	灰釉	長頸瓶	口径 7.8	平らな底部から体部がやや直線的に立ち上る、断面方形の高台を「ハ」の字状に外折して貼りつける。	内・外面とも横ナデ、高台の貼付部にヘラ痕。	良好 良好 暗灰色
61	灰釉	長頸瓶	口径 9.6	頸部で「く」の字形に屈曲し、なだらかに外反する口頸部を有す、端部は上につまみ出す、肩部は三段接合。	内・外面ともナデ、外面薄く釉付着、内面は口縁から頸部にかけて釉付着	良 良好 灰色
62	灰釉	壺	底径 20.0	体部はやや内彎気味に立ち上る、断面方形の高台が「ハ」の字形に外に接して付く。	外面は右方向にヘラ削り後ナデ、内面ナデ、内面に釉付着（底ほど密）。	良（砂混り） 良好 白灰色

トレンテ3 SO3 (土師器)

番号	器種	器形	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
82	土師器	皿	口径 14.6 底径 9.0 器高 2.1	丸い底部から体部が外に開き立ち上る。口縁部は断面方形におさめる。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色
83	土師器	皿	口径 16.0 底径 12.4 器高 1.8	平らな底部から、短い体部が外に開き立ち上る、口縁部は丸い。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色

84	土師器	皿	口径 13.0 底径 10.8 器高 1.7	体部が外に開き立ち上る。口縁端部は心もち外にうまみ出す。	内・外面とも横ナデ	不良 良好 淡朱色
85	土師器	皿	口径 13.8 底径 11.0 器高 1.7	平らな底部から、短い体部が外に開き立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色
86	土師器	皿	口径 15.0 底径 10.8 器高 1.8	平らな底部から体部がやや内彎気味に立ち口縁端部を外につまみ出す。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色
87	土師器	皿	口径 12.8 底径 6.2 器高 2.0	体部は外に開いて立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色
88	土師器	皿	口径 14.0 底径 10.2 器高 2.0	平らな底部から体部が外に開き立ち上る。口縁内側に沈線を有す。	内・外面とも横ナデ	良 良 朱色
89	土師器	皿	口径 16.4 底径 11.0 器高 3.0	丸い底部から体部が外に開き立ち上る、端部は丸くおさめる。	内・外面とも横ナデ、底部内面に回転ヘラ痕が残る、外面不成形。	良 良好 淡朱色
90	土師器	皿	口径 16.2 底径 7.0	丸い底部から内彎気味に体部が立ち上る、端部は丸くおさめる。	内・外面とも横ナデ。底部は成形不良。	不良 甘い 淡朱色
91	土師器	皿	底径 8.6	平らな底部から体部がやや外反して立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良 淡朱色
92	土師器	皿	口径 16.8	体部は内彎して立ち上り、端部で丸くおさめる。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色
93	土師器	台付皿	口径 15.2	底部に脚部のついた痕跡が残る、体部は「く」の字に屈曲し、やや内彎して立ち上る。	内・外面とも横ナデ、底部外面にコゲがつく。	良 良好 朱色
94	土師器	坏	口径 11.2 底径 8.0 器高 2.3	凸凹のある底部から体部が外に開き立ち上る、口縁端部がさらにやや外に開く。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡茶褐色
95	土師器	坏	口径 12.6 底径 8.8 器高 3.4	平らな底部から体部が外に開き立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 朱色

96	土師器	坏	口径 13.1 底径 7.8 器高 3.3	平らな底部から体部が外に開き立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色
97	土師器	坏	口径 13.4 底径 10.0 器高 2.5	平らな底部から、体部が外に開き立ち上る。口縁端部は尖り気味におさめる。	外面と口縁部内側は刷毛後横ナデ、内面は横ナデ。	良 良好 淡朱色
98	土師器	坏	口径 12.6 底径 9.0 器高 2.8	平らな底部から体部が外に開いて立ち上る。口縁端部は丸くおさめる。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色
99	土師器	坏	口径 13.7 底径 9.0 器高 2.8	平らな底部から体部が外に開き立ち上る、口縁端部はわずかに直立する。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色
100	土師器	皿坏	口径 13.6 底径 9.6 器高 2.6	平らな底部から体部が外に開き立ち、口縁端部でさらに外に開く。端部は尖り気味。	内・外面とも横ナデ	良 良好 朱色
101	土師器	坏	口径 10.4 底径 6.6 器高 3.0	平らな底部から、体部がやや内彎気味に立ち上る。端部は尖気味におさめる。	内面ナデ調整、外面口縁部ナデ、体部へう削り後ナデ	良 良好 淡朱色
102	土師器	坏	口径 11.8 底径 8.0 器高 3.0	平らな底部から、体部がやや内彎気味に立ち上る。端部は尖気味におさめる。	内・外面とも横ナデ	良 良好 白茶褐色
103	土師器	坏	口径 12.4 底径 7.0 器高 3.4	内彎したあと外につまみ出す、口縁端部内面に沈線を施す。	内・外面とも横ナデ	良 良好 灰朱色
104	土師器	坏	口径 13.0 底径 8.0 器高 2.6	平らな底部から、体部がやや内彎気味に外に開く。	内・外面とも横ナデ、底部外面にへらで切離した痕。	良 良好 白灰褐色
105	土師器	坏	口径 13.8 底径 8.6 器高 2.9	体部は始めやや内彎気味に立ち立り $\frac{1}{2}$ から外に開き立ち上る。口縁端部は外へ引き出す。	内・外面とも横ナデ調整で細かい横線が入る。	良 良好 淡朱色
106	土師器	坏	口径 14.6 底径 9.8 器高 3.1	平らな底部から体部がやや内彎気味に立ち上り、口縁で少し受口状に外に開く、	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡朱色
107	土師器	坏	底径 7.0	凸凹の底部から体部が外に開き立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 薄朱色

108	土師器	坏	底径 8.2	平らな底部から、外部がやや外反して立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 白朱色
109	土師器	坏	底径 8.4	体部が外に開き立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 淡黄土色
110	土師器	坏	底径 9.4	体部が外に開き立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 薄朱色
111	土師器	坏	底径 9.8	体部が外に開き立ち上る。底部端に断面方形の高台が付く。	外面横ナデ	良 良好 外：赤茶色 内：薄朱色
112	土師器	坏	底径 9.8	断面方形の高台が付く。	内・外面とも横ナデ	不良 良好 淡朱色
113	土師器	坏	口径 16.0 底径 12.0 器高 5.6	体部は外に開き立ち上る、底部の端に高台が付いていたと思われる。深い形態。	内・外面とも横ナデ	良 良好 外：黒灰色 内：薄茶褐色
114	土師器	坏	口径 19.2	体部が外に開き立ち上り、貼り付高台を持つ。	内・外面とも横ナデ、体部と高台との接合部にきざみ目を施す。	良 良 朱褐色
115	土師器	鉢	口径 24.6	体部は外に開き、口縁部でさらに外に引き出す。口縁部は薄くしている。	内・外面とも横ナデ	良 良 朱色
116	土師器	蓋		平らな天井部の中央に扁平な擬宝珠様つまみを有す。	ナデ	良 良 赤茶色
117	土師器	蓋		平らな天井部の中央に付く擬宝珠様つまみ、扁平で中央がやや突出した形態を呈す。	ナデ	良 良 薄茶色
118	土師器	蓋	口径 17.2 器高 2.7 (つまみ除く)	ゆるやかに内彎しながら下垂し、端部は外に引き出す。端部にわずかに段を有す。	外面削後横ナデ 内面横ナデ。	良 良 赤茶色

119	土師器	甕	口径 12.0	口辺部は外に大きく開き $\frac{1}{2}$ のところ上で上部に引き上げられる。端部は丸くおさめる。	刷毛状のものによる調整後指ナデ。指頭庄痕残る。	不良 甘内：灰茶褐色 外：赤茶褐色
120	土師器	甕	口径 12.4	頸部は外に開き、「く」の字状口縁を呈す、端部は丸くおさめる。	外面削後ナデ 内面ナデ	不良 甘茶褐色
121	土師器	甕	口径 12.8	「く」の字状口縁を呈す、頸部の屈曲はゆるやか、やや内彎気味に立ち上る。	外面削後ナデ 内面ナデ	不良 甘茶褐色
122	土師器	甕	口径 14.4	「く」の字状口縁を呈す、頸部はゆるく外に開き口縁部で屈曲し内彎する。口縁外面に沈線を施す。	外面横ナデ 内面横ナデ	良 良薄茶色
123	土師器	甕	口径 14.6	「く」の字状口縁を呈す、頸部にて外に開き、端部付近で内彎する。端部は丸くおさめる。	外面削後ナデ 内面ナデ	不良 甘茶褐色
124	土師器	甕	口径 15.2	「く」の字状口縁を呈す、口縁端部をやや肉厚にし、尖り気味におさめる。	内・外面とも横ナデ	良 良茶褐色
125	土師器		口径 24.2	口辺部は外に大きく開き、端部で下方に屈曲する。端部上方に帯が貼りつく。	内・外面とも横ナデ	良 良朱色
126	土師器	壺底部	底径 7.6	平らな底部から体部がやや外反気味に立ち上る、底部に段を有す。	内・外面とも横ナデ 底部へラ痕	やや良 良好白朱色
127	土師器	壺底部	底径 9.4	平らな底部から体部がやや内彎気味に立ち上る。	外面ナデ、内面へラ削り後ナデ。	良 良好灰褐色

トレンチ3 SO3 (須恵器)

番号	器種	器形	法量 (cm)	形態	手法	備考
128	須恵器	蓋	口径 14.8	ゆるやかに内彎しながら下垂する。	外面横ナデ	良 良好暗灰褐色

129	須惠器	蓋	口径 器高	15.8 3.0	ゆるやかに内彎しながら下垂し 端部を下に屈曲させる。平らな 宝珠がつく。	削り後、横ナデ。	良 良好 淡灰色
130	須惠器	皿	底	10.4	平らな底部に高台がつく皿と思 われる。	ナデ調整	良 良好 青灰色
131	須惠器	坏	底器	5.0	体部が内彎気味に立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 灰色
132	須惠器	坏	底器	7.4	体部がやや内彎気味に立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 白灰色
133	須惠器	坏	底器	8.6	中央の盛り上った底部から、体 部が外に開き立ち上る。	内面及び体部外面はナデ調整、 底部回転ヘラ切り。	良 良好 青灰色
134	須惠器	坏	口径 底器 器高	11.4 6.0 4.6	体部は外に開き立ち上る、底部 はやや中心で盛り上り、断面台 形の高台が貼りつく。	内・外面とも横ナデ	良 良好 暗灰色
135	須惠器	坏	口径 底器 器高	13.8 8.4 5.2	体部は外に開き立ち上る、断面 台形の高台を持つ。	内・外面とも横ナデ	良 良好 暗褐色
136	須惠器	坏	口径	15.8	体部は外に開き立ち上る。	内・外面とも横ナデ	良 良好 暗灰褐色
137	須惠器	坏	底径	10.8	平らな底部に断面台形の高台が 付く。	内面ナデ	良 良好 灰褐色
138	須惠器	坏	底径	9.4	断面台形の高台が付く。	ナデ調整	良 良 灰褐色
139	須惠器	坏	底径	5.4	断面半円形の高台を有す。	摩耗がはげしい。	良 良好 淡青灰色
140	須惠器	坏	底径	9.6	体部は外に開き立ち上る。断面 三角形の低い高台を有す。	内・外面とも横ナデ	良 良 白灰色

141	須恵器	壺	口径 13.6	体部はゆるやかに内彎しながら立ち上る、口縁端部を外につまみ出す。	内・外面とも横ナデ	良 良好 灰褐色
-----	-----	---	---------	----------------------------------	-----------	----------------

トレンチ3 SO3 (灰釉陶器)

番号	器種	器形	法量 (cm)	形態	手法	備考
142	灰釉	壺	口径 15.4	体部は内彎気味に立ち上り、口縁端部を外につまみ出す。	内・外面とも横ナデ、内面にうぐいす色の釉付着。	不良 良好 灰褐色
143	灰釉	壺	底径 6.6	体部はやや内彎して外に開く。断面三日月形の高台を有す。	外面ナデ調整	良 良好 灰色
144	灰釉	壺	底径 6.4	断面台形の高台が付く。	内・外面とも横ナデ、底部に糸切り痕残る。	良 良好 淡茶灰色
145	灰釉	壺	底径 6.6	体部はやや内彎気味に外に開き立ち上る、断面台形の高台が貼り付く。	内・外面とも横ナデ	良 良好 茶白灰色
146	灰釉	壺	底径 7.4	体部は内彎気味に外に開き立ち上る、断面半円形の高台が付く。	外面横ナデ、内面全体に薄緑の釉付着。	良 良好 白灰色
147	灰釉	皿	口径 14.0 底径 6.4 器高 2.4	体部はゆるい角度でやや内彎して開き、口縁端部で外につまみ出す。断面方形の低い高台が付く。	内・外面とも横ナデ、内面に薄緑色の釉付着。	良 良好 灰褐色
148	灰釉	段皿	口径 8.4	体部はゆるい角度で外に開く。口縁部はやや外反し尖り気味におさめる。内側に段を持つ。	外面上部削り後ナデ、内面ナデ、段の部分削り、内面全体に薄緑の釉付着。	良 良好 灰色
149	灰釉	盤	口径 19.5 底径 11.0 器高 3.9	盤部は高台付根よりゆるい角度で横にのびた後、外反しながら斜め上方へ立ち上る。外に開く高台が貼り付く。	ナデ調整	良 良好 内：灰褐色 外：白灰色
150	灰釉	長頸瓶	口径 7.4 頸口部高 6.9	肩部から口頸部がほぼ直立し、口縁部で外反しながら開く。端部は上と下につまみ出す。	内・外面ともナデ、外面、縦半分に釉付着。	良 良好 外：暗灰色 内：灰褐色

151	灰釉	長頸瓶	口径 7.6 口頸部高 6.3	まっすぐ外に開く口頸部をもち、口縁で外折した後、上方へつまみ出す。	内・外面ともナデ、外面縦半分 <u>にうぐいす色の釉</u> 付着、内面点状に釉付着。	良 良好 茶灰色
152	灰釉	長頸瓶	口径 8.2 口頸部高 7.4	口頸部は基部でやや内彎気味に外に開き立ち上る。口縁部で外折した後、上につまみ出す。	内・外面ともナデ、緑茶色の釉が内外とも付着。	良 良好 灰褐色
153	灰釉	長頸瓶	口径 8.2 口頸部高 7.7	口頸部は外に開き立ち上る、口縁部で外折した後、上へつまみ出す。	内・外面ともナデ、外面縦半分 <u>にうぐいす色の釉</u> 付着、内側口縁部にも濃く釉付着。	良 良好 濃茶灰色
154	灰釉	瓶	底径 7.4	卵型の体部をもつ。高台は外に開き、底と内側がしばむ。	外面へラ削り後ナデ、肩部まで <u>うぐいす色の釉</u> 付着、底部表にも釉付。	良 良好 灰色
155	灰釉	瓶	底径 8.2	体部は内彎しながら立ち上る、断面台形の高台が貼り付ける。	削り後ナデ、底部内面は渦巻状に削り痕。	良 良好 白灰色
156	灰釉	瓶	底径 9.1	卵型の体部をもつ。直立した長い高台をもつ。	削り後ナデ	良 良好 灰色

トレンチ3 SO3 (山茶碗)

番号	器種	器形	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
157	山茶碗	碗	底径 7.4	厚い底部から体部が外に開いて立つ。	ナデ、底部に糸切り痕る。	不良 良好 白灰色
158	山茶碗	碗	底径 7.8	体部はやや内彎気味に外に開いて立ち上る、断面三角形の高台をもつ。	内面底部の端に重ね焼の痕跡。体部内面に釉付着。	不良 良好 灰色

杉沢遺跡の調査

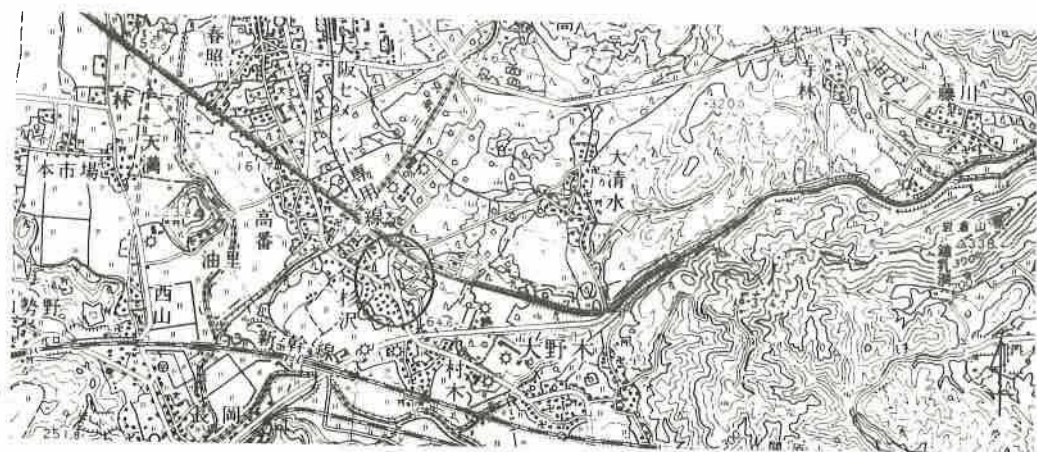
第1章 調査にいたる経過

滋賀県坂田郡伊吹町杉沢には、周知の遺跡として集落の北西を除くほぼ全域に及ぶ範囲に杉沢遺跡が所在している。同遺跡は縄文時代の遺跡として周知され、今日までに昭和13年の小林行雄らによる確認調査^②と昭和63年の団体営ほ場整備に伴う緊急発掘調査^③が行われている。

明治以来、杉沢では石器が出土することが知られており、昭和初期には島田貞彦や柏倉亮吉による研究がある^④。昭和13年の調査では集落のほぼ中心に位置する勝居神社南東で、2組の縄文時代晩期後半の合口甕棺が検出され、広く紹介されて同遺跡を一躍著名なものにした。さらに、昭和63年の調査では、縄文晩期前半の良好な一括資料が集落南端から検出され、それまで後期の一時期と晩期後半の集落と扱われていた杉沢遺跡の再評価と、今後の調査の必要性が求められた。

今日、杉沢地区周辺では住宅団地・工場用地・道路の新設などの開発事業が計画されている。今回の調査では、今まで確認されていない遺跡範囲の北と東、ならびに中央部においてトレンチを設けることで、遺跡の有無ならびに性格を明らかにし、今後これらの開発に備えて本遺跡を保護することを目的に行った。

調査は伊吹町教育委員会が実施し、現地における発掘調査は平成3年5月より7月にかけて行った。



第17図 杉沢遺跡位置図 (S=1:50,000)

第2章 遺跡の位置と環境

■ 位 置

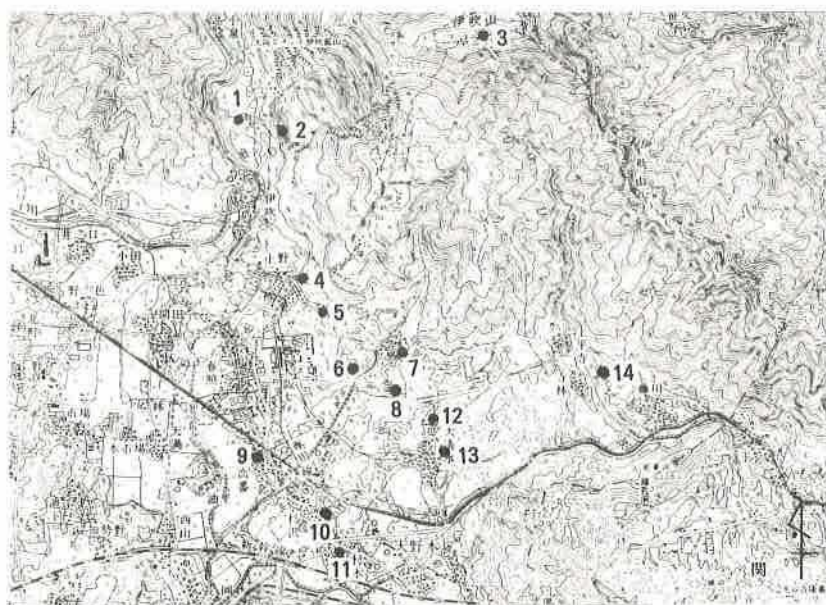
坂田郡伊吹町は滋賀県の北東端に位置する。町名の由来である伊吹山（標高 1377 m）は滋賀県と岐阜県の境にそびえる県下一の高峰で、杉沢遺跡はその南麓に広がる複合扇状地の扇端に位置する。東は伊吹山と霊仙山の山狭部を抜け岐阜県関ヶ原町に到り、西には湖北地方の平野部が広がる。

■ 歴史的環境

町内には縄文時代の遺跡がかなり知られており、その多くが伊吹山南麓の扇状地上にある。石器類が採集されている上野・上平畑遺跡（石斧）、人塚遺跡（石槍）、東野遺跡（石鏃・石匙）、村木・大清水遺跡（石棒）や、縄文中期の土器や黒曜石が出土した井の田遺跡、勾玉をはじめ石鏃・石棒が出土している高番遺跡などである。

さらに、町内を南北に貫流する姉川がつくりだす河谷部の段丘上や山腹には、太平寺・伊吹遺跡や曲谷の起し又遺跡などが所在し、起し又遺跡からは後期の土器が出土している。

これらの遺跡の実態はまだまだ不明であり、杉沢遺跡のみ本格的な調査の手が及んでいるのが現状である。



1. 伊吹遺跡
2. 太平寺遺跡
3. 伊吹山頂遺跡
4. 上野遺跡
5. 人塚遺跡
6. 野頭遺跡
7. 堂ノ前遺跡
8. 東野遺跡
9. 高番遺跡
10. 杉沢遺跡
11. 村木遺跡
12. 井の田遺跡
13. 大清水遺跡
14. 上平畑遺跡

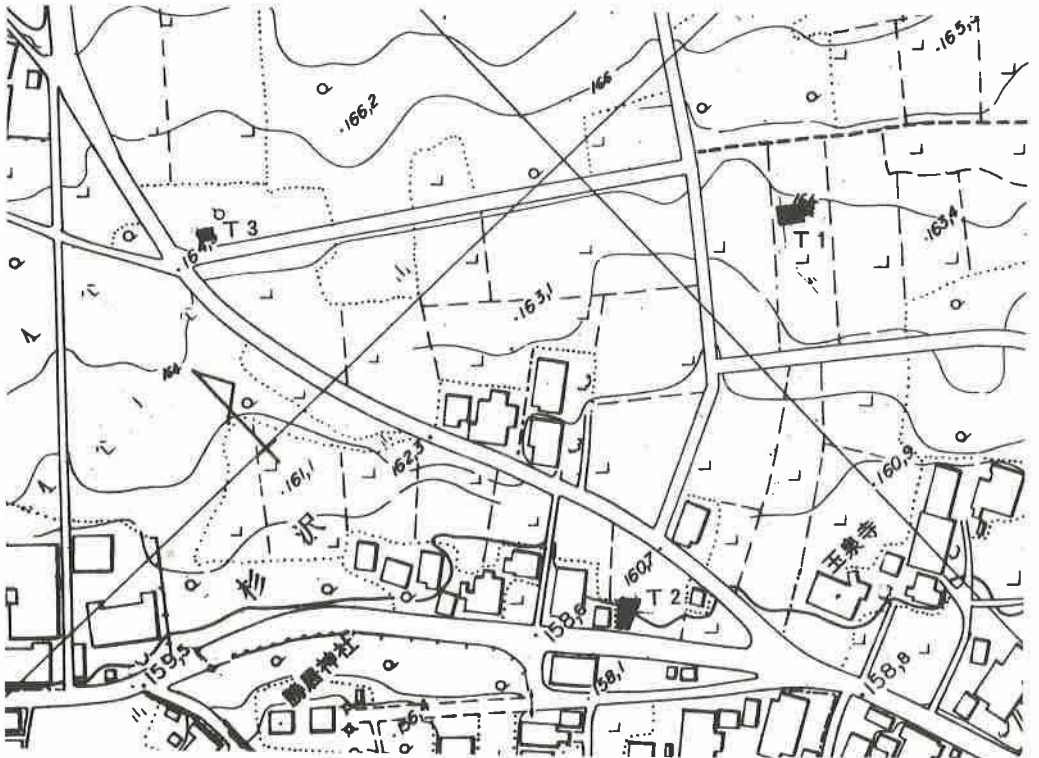
第18図 伊吹山麓の縄文遺跡分布図

第3章 調査の経過

調査は、『滋賀県遺跡地図』の範囲を基礎とした。杉沢からの遺物の出土は勝居神社から南の住宅地内に集中しており、小字名としては、門田、川東、南川、大沢、神明下、出晴などがあげられる。

集落の西から南にかけて広がる水田は、ほ場整備事業に伴う試掘調査を既に行っており、遺跡範囲はある程度確定されている。今回確認調査を行った北と東の部分については、地目の多くが畑地で、この地方の幹線道路である国道365号線が通り、今後の開発が予想される地区である。そこで、トレンチ1をほぼ東端にあたる小字南川に設け、トレンチ3を北にあたる小字野神に設定した。またトレンチ2は、過去耕作中に何度か土器片が出土し、比較的遺構面が浅いと考えられた勝居神社南東の畑地を選び確認を行った。

調査の方法は、バックホーを用いて表土を取り除き、人力による遺構・遺物の検出を行い、写真撮影、平面図の作成等を行ったあと、埋め戻しをして保存を図った。初日の調査では、区民の多くの方の参加をいただき、地元の遺跡について触れていただく機会とした。



第19図 トレンチ配置図 (S=1:2,500)

第4章 調査の結果

調査の結果、遺構が検出されたのはトレンチ1と2で、トレンチ2では包含層や遺構から縄文式土器や土師器、須恵器を検出した。しかし、各トレンチとも面積の制限により遺構の性格を明らかにするまでにはいたらなかった。トレンチ3は土師器の細片がわずかにみられたのみで、発掘調査にまではいたらなかった。

● トレンチ1

トレンチ1における土層は、約25～30cmの表土を除くと茶褐色粘質土が約20cm堆積し、それを除去すると黄褐色砂質土があらわれ遺構面となる。茶褐色粘質土からは、地表約45cmあたりで須恵器・土師器と縄文式土器の細片数点と石鏃が一点出土している。

検出した遺構は深さ約18cm、最大幅約190cmの溝状遺構SD1と、幅約110cm、深さ約16cmの円形を呈すと思われる土壌のみで、両方とも5cm大の礫を多く含む茶褐色粘質土が埋土であった。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

● トレンチ2

トレンチ2の調査では地表から約30cm下にある茶褐色粘質土の遺構面1を検出し、さらに約20～30cm掘り下げたところで黄褐色粘質土となり、土壌と集石を検出した。これを遺構面2とした。土層の順序としては、表土、暗茶褐色砂質土、茶褐色粘質土（礫含む）、黄褐色粘質土となる。

〔遺構面1〕

溝状遺構（SD2～4）：ほぼ南北方向の溝状の遺構で、SD2、3は幅約40～70cm、深さ約2～8cmを計る。SD2からは須恵器の細片が出土している。SD4は最大幅約100cm、深さ約12～20cmの南に深い溝状遺構で、埋土は明茶褐色粘質土と暗茶褐色砂質土である。埋土内から須恵器蓋や土師器片を検出した。

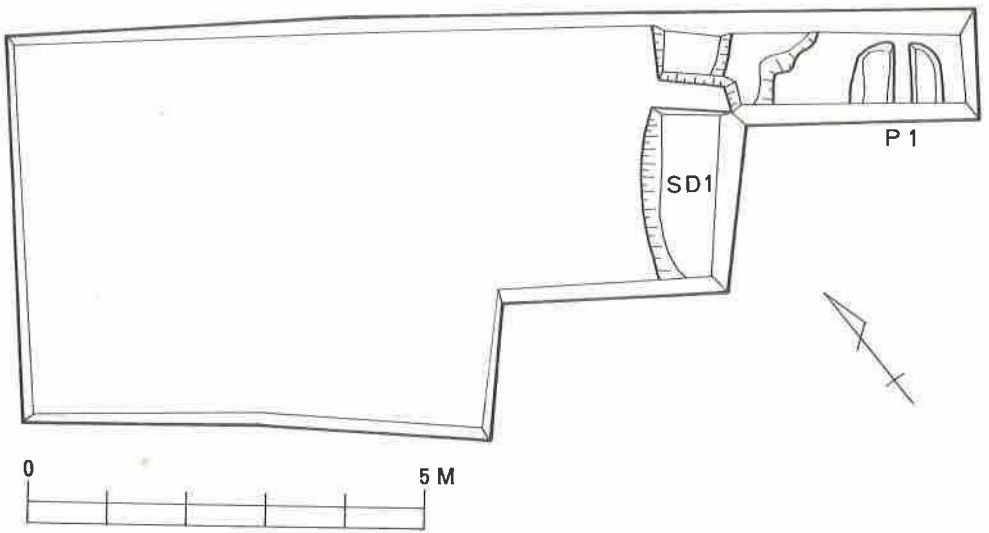
土壌（P2～6）：P2、5、6は、幅約50cm、深さが約12cmの円形をした土壌で、P5からは土師器、縄文式土器の小片が検出された。P3は幅約70cm、深さ約9cmで、埋土中からは焼土、焼石、炭化物が検出された。伴う遺物は無かった。P4は幅約100cm、深さ約17cmのほぼ円形をした大きなもので、埋土内は上層が薄茶色粘質土、下層が暗茶褐色粘土であった。P4は東側をSD4によって切られており、また、埋土中に縄文式土器が検出されることから考えてもSD4に先行するものであろう。

〔遺構面2〕

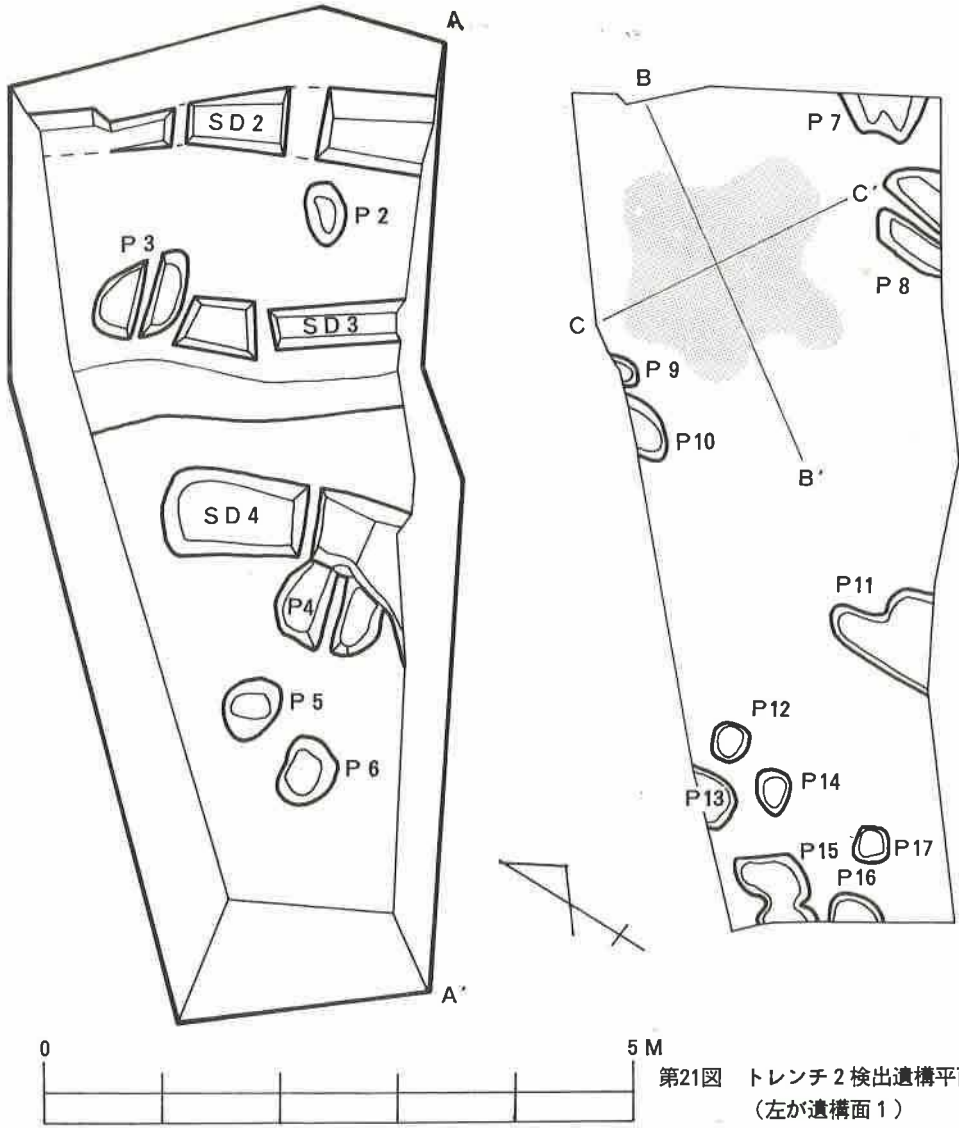
遺構面1を形成する茶褐色粘質土を約20～30cm掘り下げると、黄褐色粘質土が表れる。茶褐色粘質土層中には縄文式土器片が含まれ、黄褐色粘質土上では土壌と、集石状遺構を検出した。

土壌（P7～17）：P7、9～17は深さが約5～10cmの浅い土壌で、円形または不定形を呈している。遺物の検出はなく、規則的に方ないし円形に並ぶものもないので、その性格はわからない。P8は他と違いやや深い土壌で幅約90cm、深さ約35cmある。埋土中に縄文式土器の小片をわずかに含んでいた。この土壌は内部の膨らむ形をしており、底の側壁部分に直径5cmほどの円礫が並んでいるような状態で置かれてあった。P8は集石と隣接しあっている。

集石状遺構：トレンチ2の北東部分に、最大27cm×18cmから最小1cmの大小の角礫が、東西約310cm、南北約320cmの範囲内に集中して所在していた。ごく一部に直線状あるいは弧状に並ぶところはあるものの、全体としては不定形で、石を配したものなのか、自然のものなのかは判断できない。ただ、遺構の南西部の集石の中で縄文式土器の底部が検出されて、遺構とのなんらかの関係が考えられる。一部を断ち割り下層の確認を行ったが、遺構、遺物等はみられなかった。

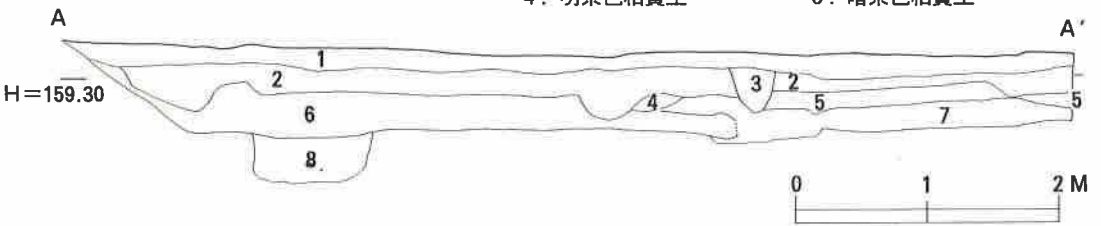


第20図 トレンチ1検出遺構平面図

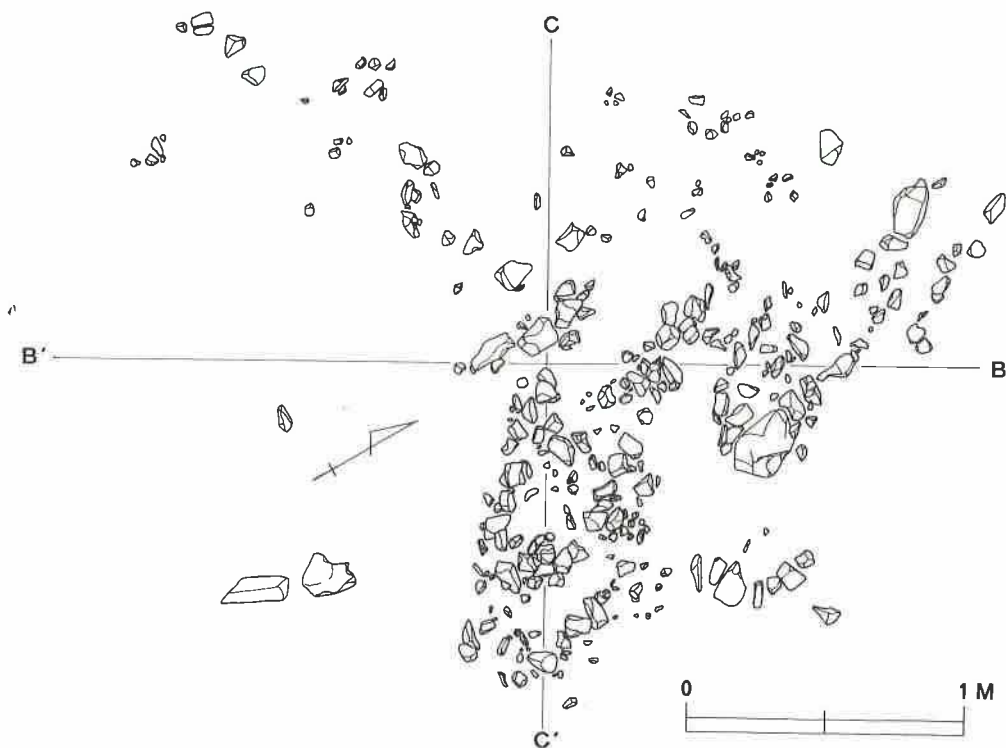


第21図 トレンチ2 検出遺構平面図
(左が遺構面1)

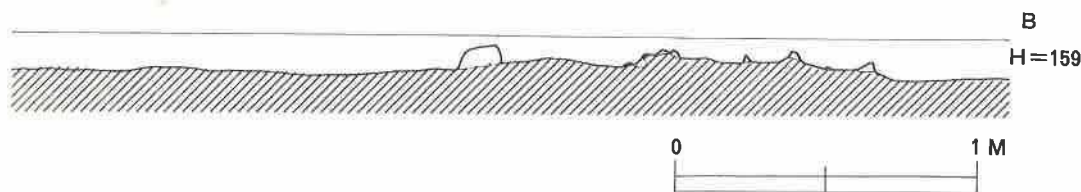
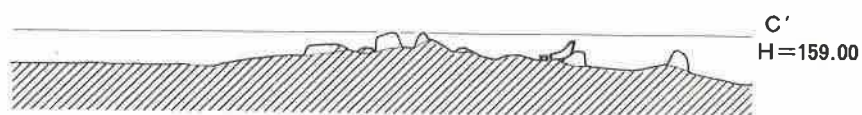
- | | |
|------------|------------|
| 1. 耕土 | 5. 茶褐色砂質土 |
| 2. 暗茶褐色砂質土 | 6. 茶褐色粘質土 |
| 3. 茶褐色砂質土 | 7. " (礫含む) |
| 4. 明茶色粘質土 | 8. 暗茶色粘質土 |



第22図 トレンチ2 遺構断面図



第23図 集石状遺構平面図



第24図 集石状遺構断面図

第5章 出土遺物

今回の調査で出土した遺物について説明を加える。杉沢遺跡発掘調査で出土した遺物は、縄文式土器・土師器・須恵器などの土器と石器である。

第1節 土 器

(1) トレンチ1出土土器

縄文式土器

(1) は土師器や須恵器の細片等と共に茶褐色粘質土層から出土した甕もしくは浅鉢の口縁部である。体部にくらべ口縁部がやや肉厚になり、端部で丸くおさめている。2本の沈線が入る。

(2) トレンチ2出土土器

トレンチ2では遺構面1の包含層で、細片ではあるが縄文式土器・土師器・須恵器を検出、溝状遺構SD4、土壌P4・P5から縄文式土器・土師器・須恵器を、遺構面2の包含層で縄文式土器を、遺構面2の集石上で縄文式土器を検出した。

縄文式土器

(2～4) はP4からの出土である。(2) は胴部で、数条の強い横なでの痕跡がある。(3・4) は貝殻条痕が施されている。(5) は深鉢でP5からの出土である。口縁端部に突帯が貼りつき、そのやや下に1条の横なでが施される。(6～10) は茶褐色粘質土中に含まれていたもので、(6) は底の平らな底部である。(7～9) は貼り付け突帯を持つ深鉢で、(7・8) は口端部やや下に(9) は口縁端部に突帯が付く。(10) は浅鉢で口縁部で「く」の字に屈曲し、外面は丁寧に研磨されている。口縁部に2本の沈線が施される。(11) は集石状遺構に伴って出土した丸底の深鉢で、表面が剥離しているために調整は不明である。

土師器

(12) はP5から出土した土師器の坏で、断面三角形の高台を持つ。

須恵器

(13) はSD4から出土した須恵器の蓋で、平らな天井部から体部がゆるやかに下垂して端部で屈曲する。かえりは痕跡のみとどめる。(14) は壺の底部で回転糸切り痕が残る。

(3) トレンチ 2 周辺出土土器

縄文式土器

トレンチ 2 を設定した畑地では過去に縄文式土器片が耕作中に出土しており、今回の調査と並行して、北へ約 2 m 離れたところで試掘をおこなった。(15~16) はそのおりに地表下約 20 cm のところで出土したもので、口縁端部に「D」字状の突帯を持つ深鉢である。(15) は突帯の下に沈線を施す。

第 2 節 石 器 (16)

トレンチ 1 の茶褐色粘質土層から出土したサヌカイト製の石鏃で、刃部および一方の側面の一部を欠く。

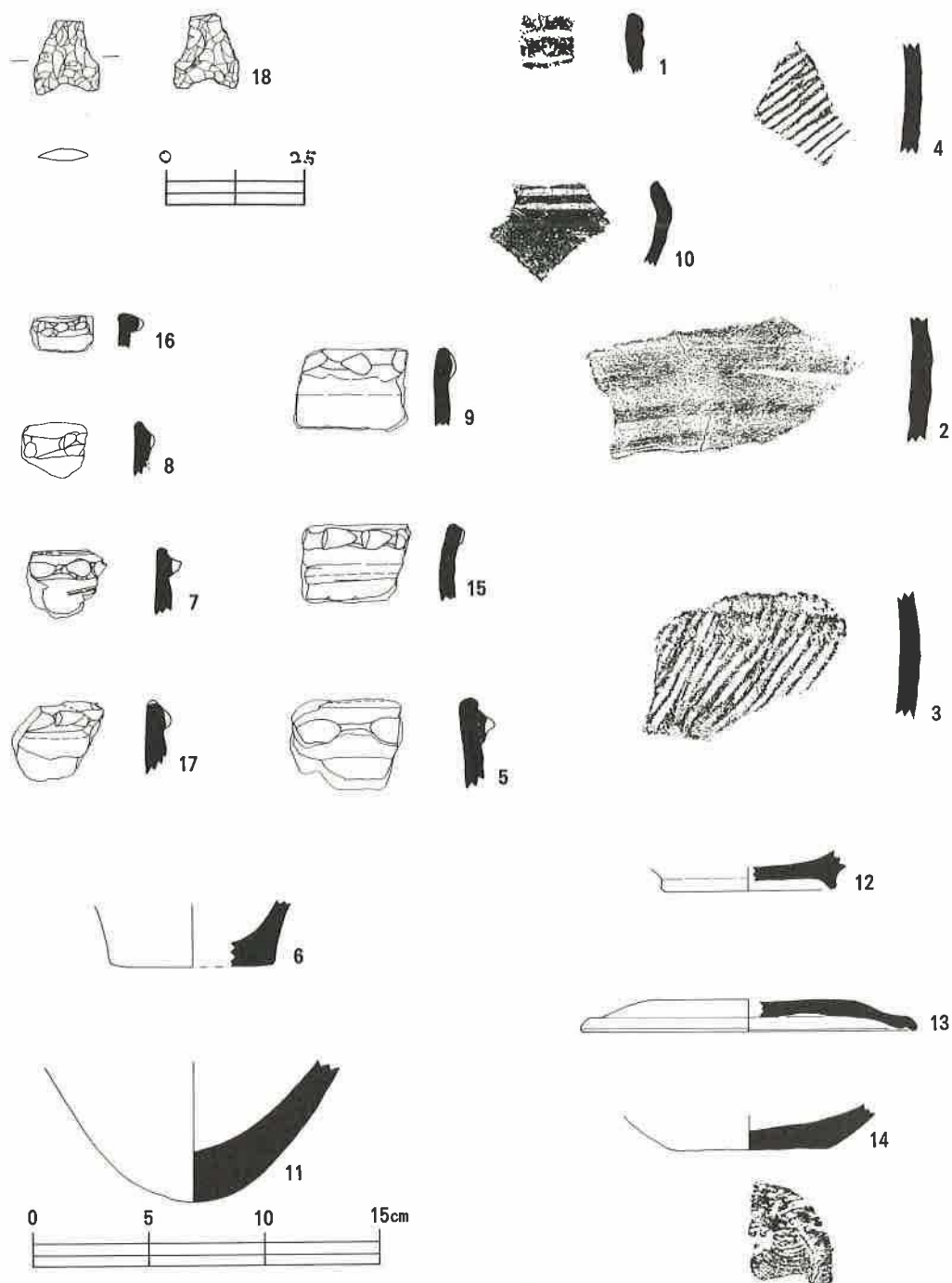
第 6 章 ま と め

今回の調査で設定した 3 つのトレンチのうち、北と東のトレンチは杉沢遺跡の範囲を確認するためのものであった。その結果東のトレンチ 1 においては、遺構とわずかに土器片、石鏃等を検出した。過去に遺物の出土が確認されていないこの地区において、わずかではあるが遺構ならびに遺物の存在が確認できたことは、今後遺跡を保護していく上で重要であろう。北の字「野神」に設定したトレンチ 3 は、範囲が狭かったこともあり遺構は検出されなかったが、土師器の細片が 2~3 点みられ周辺に遺跡の存在を感じさせる。

トレンチ 2 を設定した畑地は、昭和 13 年の調査で合口甕棺が 2 基出土した地点に近く、過去幾度か耕作中に土器片が発見されていた。今回の調査では上面より平安時代の遺物とそれに伴うと考えられる遺構が検出できた。縄文時代の遺跡としてあまりにも有名な杉沢遺跡で、平安時代と考えられる遺構面が確認できたのは今回が初めてで、今後の調査の指針となるであろう。

トレンチ 2 で検出した集石状遺構は企画的な配列がなされておらず、人工的なものなのか自然のものなのかは明確に判断できなかった。しかし、東日本を中心に石を集めた配石遺構が墓域に伴って検出される例も多く、トレンチ 2 を設定した地区が合口甕棺が分布する墳墓地域と考えられることから、この集石状遺構が合口甕棺などに伴う祭祀的なものであった可能性も考えられる。

今回の調査である程度杉沢遺跡の範囲がつかめ、遺跡の性格のごく一部が判明した。しかし、その全容解明はこれからの調査にかかっている。今後も引き続き杉沢遺跡の保護を図ってきたい。



第25図 出土遺物

〔註〕

- ① 高橋順之『伊吹町内遺跡分布調査報告書』（伊吹町教育委員会 1992年）
- ② 小林行雄ほか「近江坂田郡春照村杉澤遺跡」（『考古学』9-5 1938年）
- ③ 用田政晴『杉澤遺跡発掘調査概要報告書』（伊吹町教育委員会 1988年）
- ④ 島田貞彦「有史以前の近江」（『滋賀県史蹟調査報告』第1冊 1928年）
柏倉亮吉『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』1936年

圖 版



調査前状況



作業風景



トレンチ1 全景



トレンチ2 全景



遺物出土状況 (SO2)



同上



トレンチ3 全景



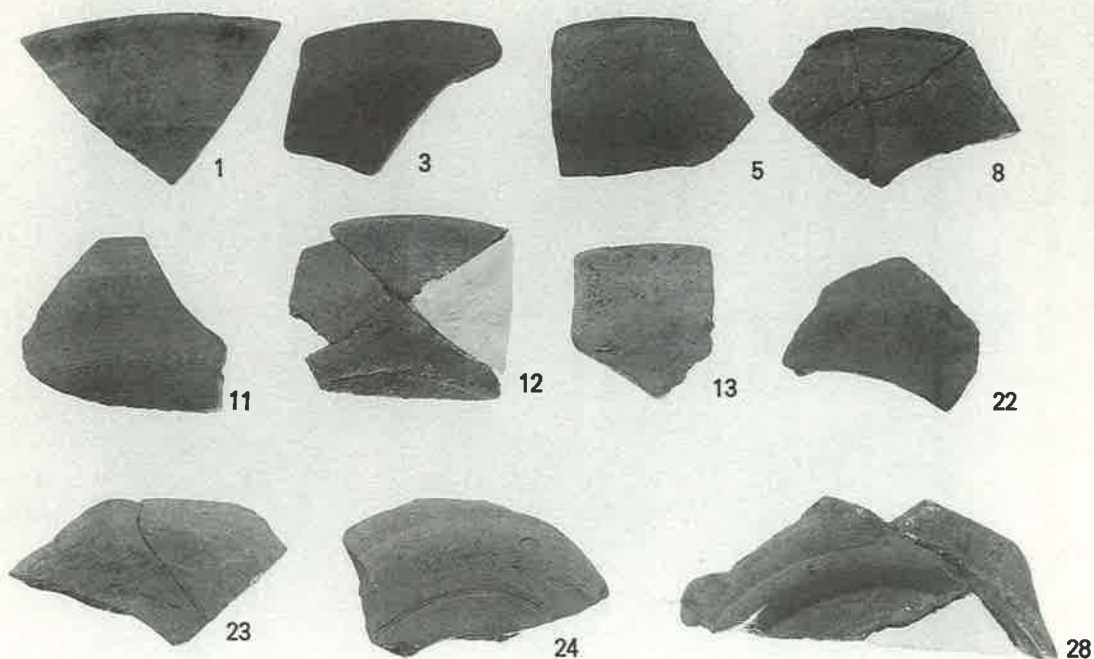
作業風景（トレンチ3）



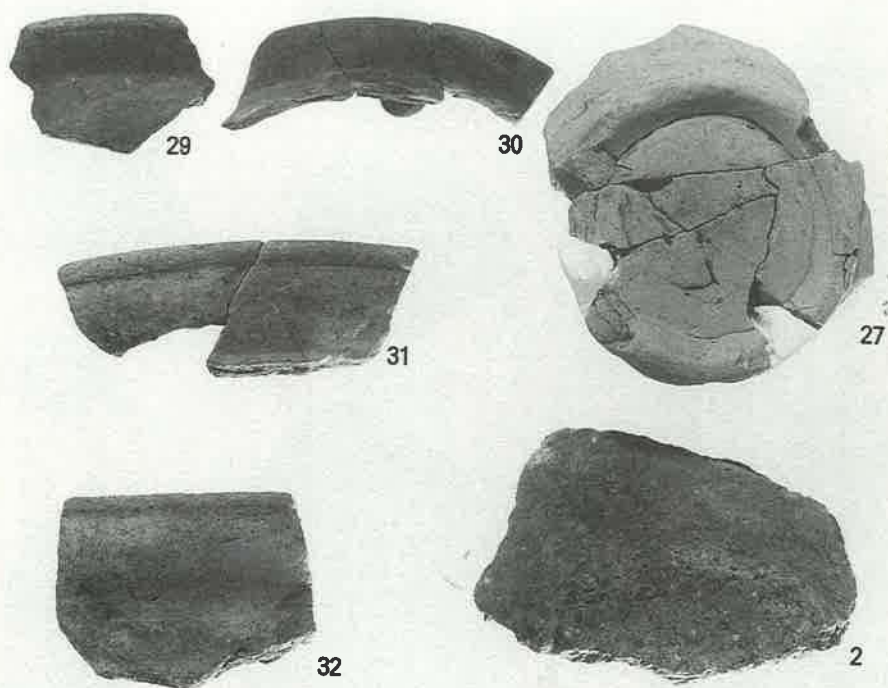
遺物出土状況 (S03)



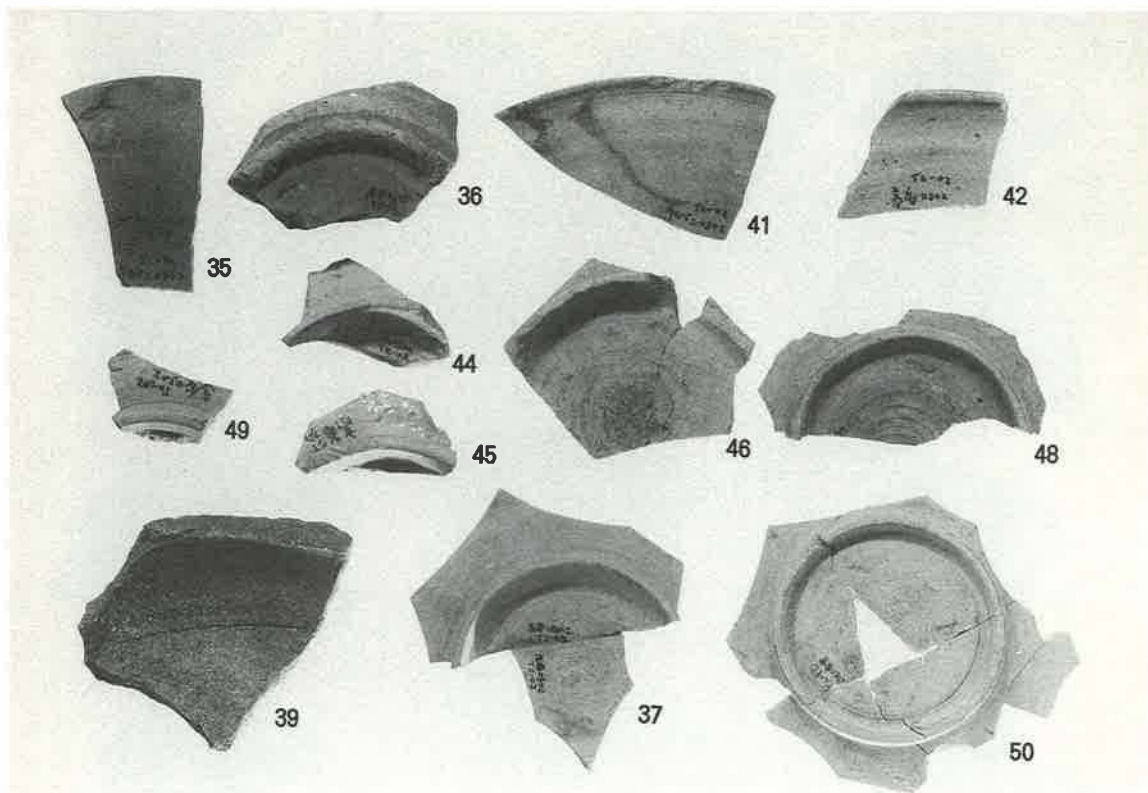
同上



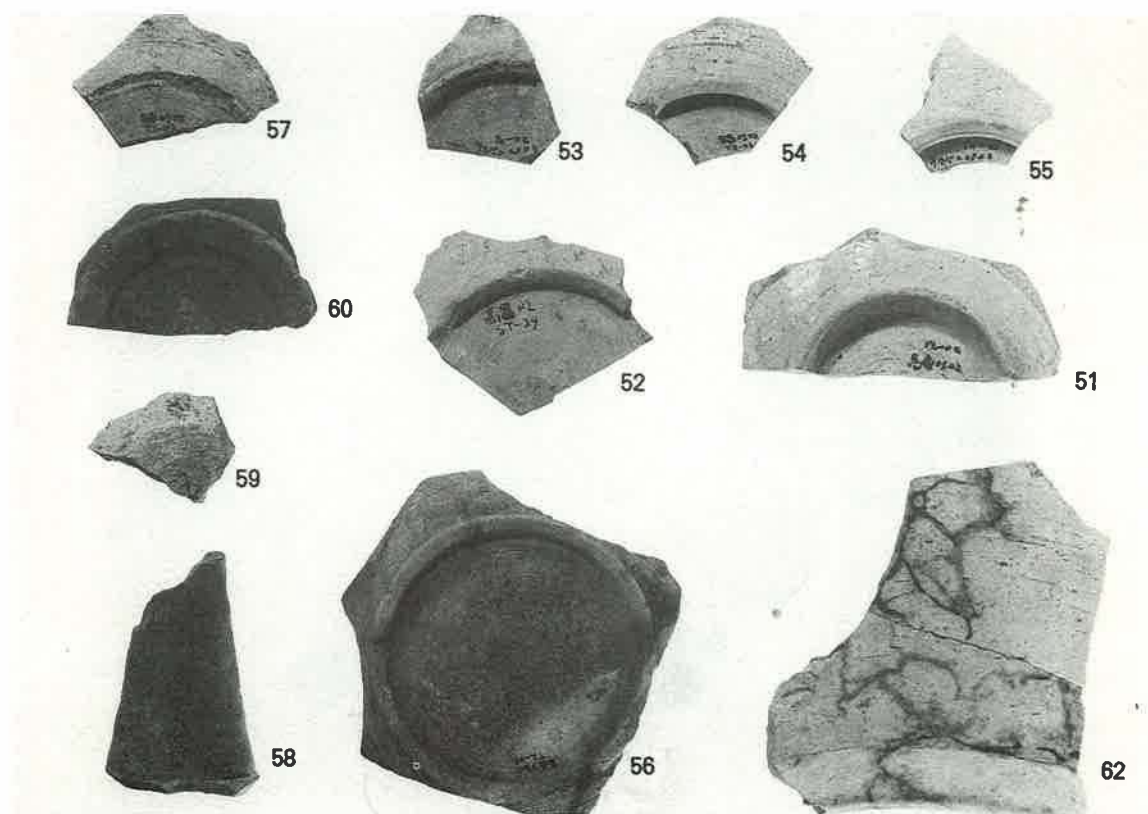
出土遺物 (SK1・SO2)



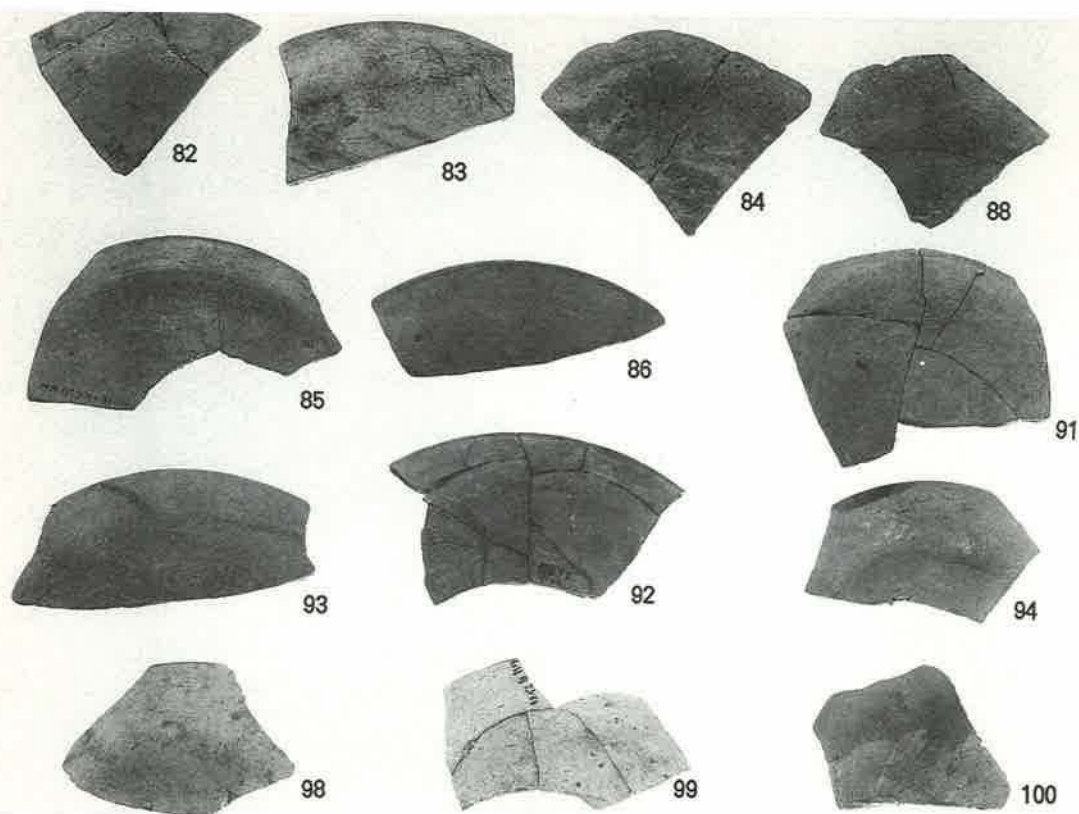
出土遺物 (SO2)



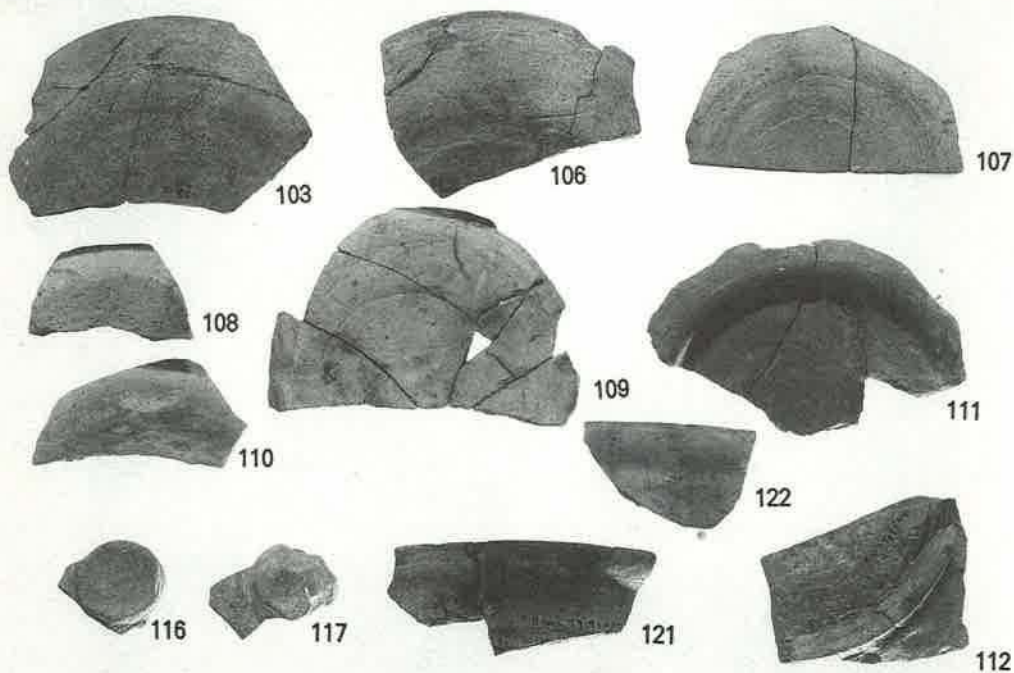
出土遺物 (SO2)



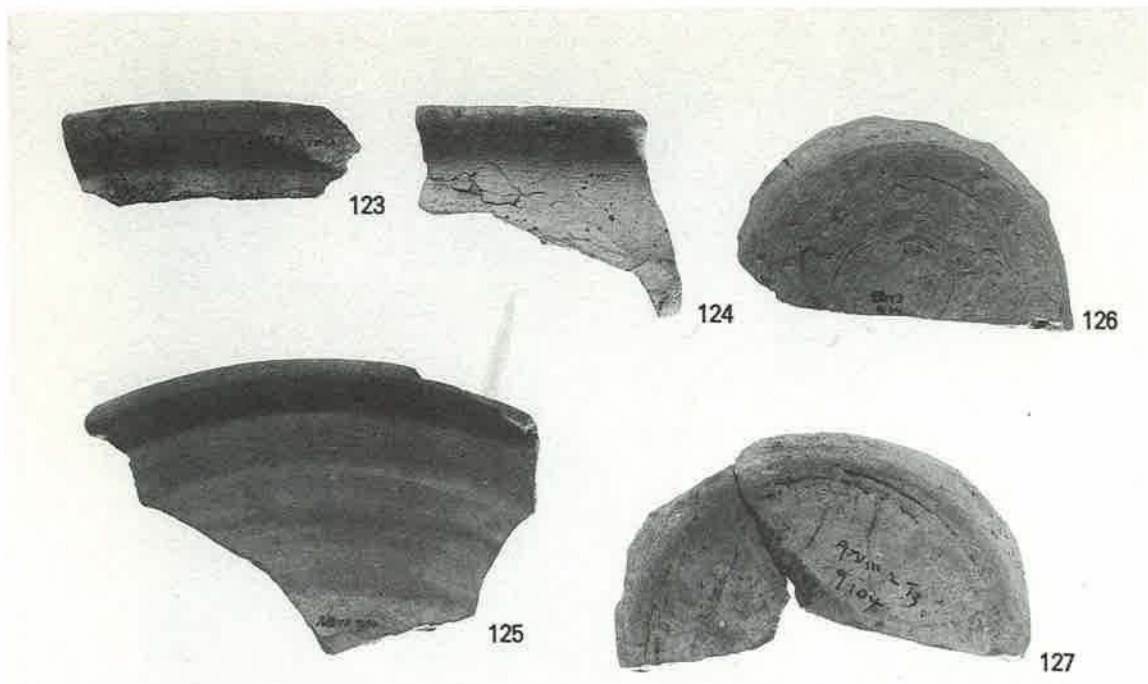
同上



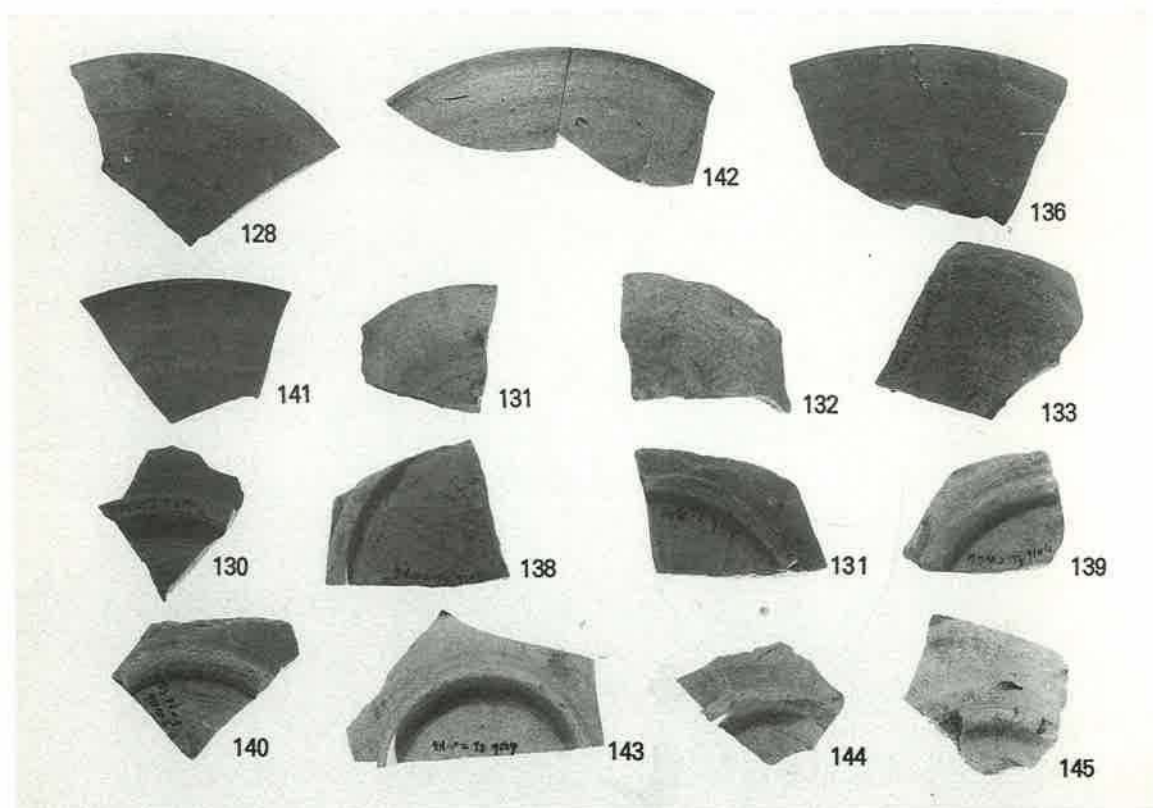
出土遺物 (S03)



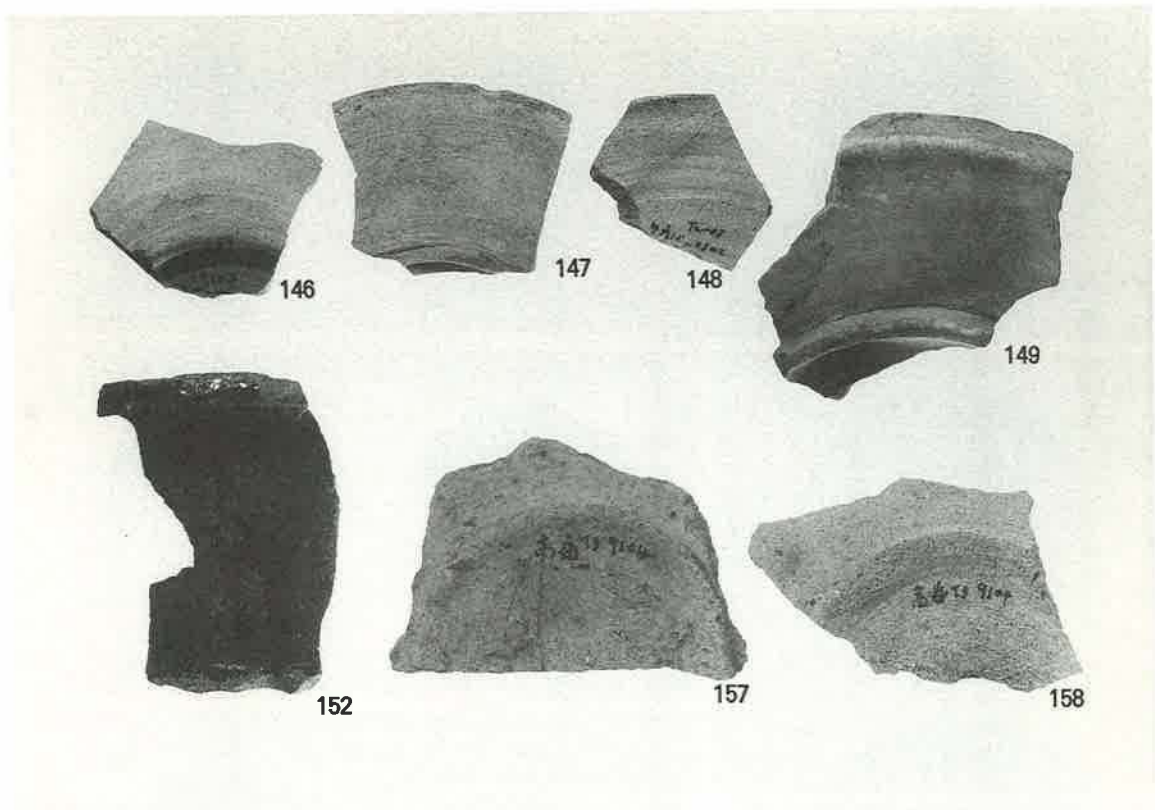
同上



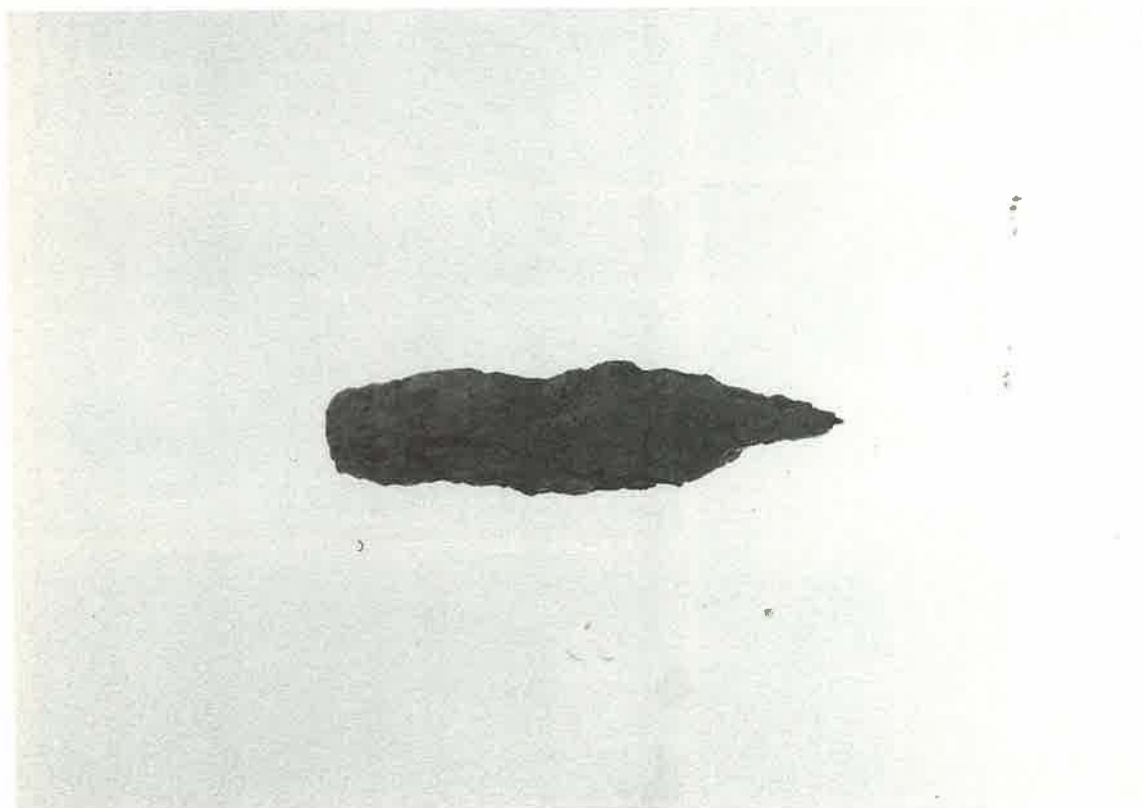
出土遺物 (S03)



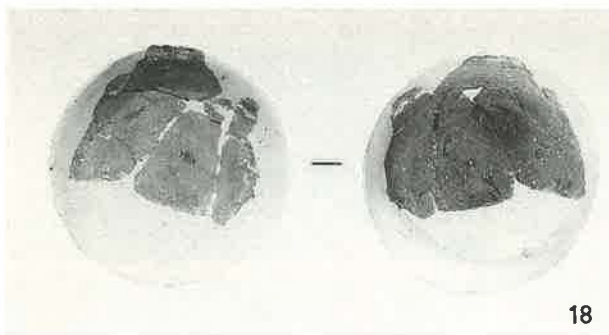
同上



出土遺物 (SO3)



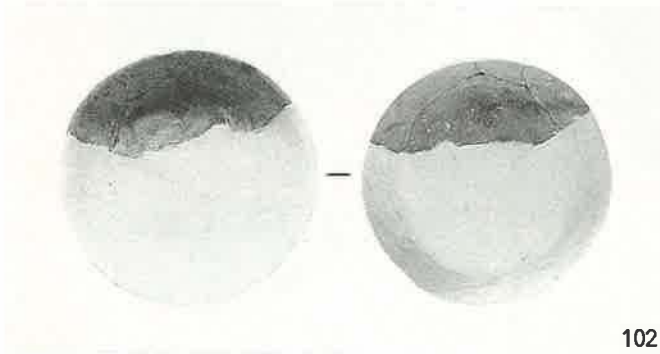
金属器 (159)



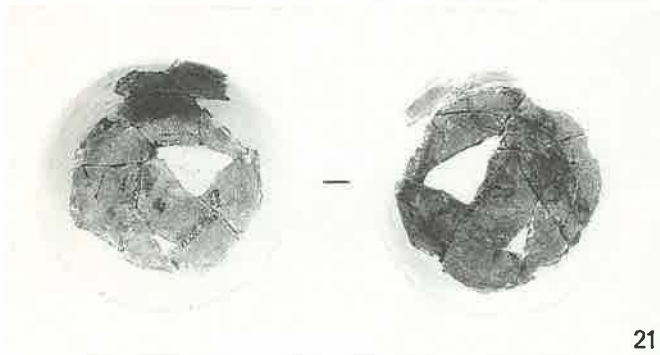
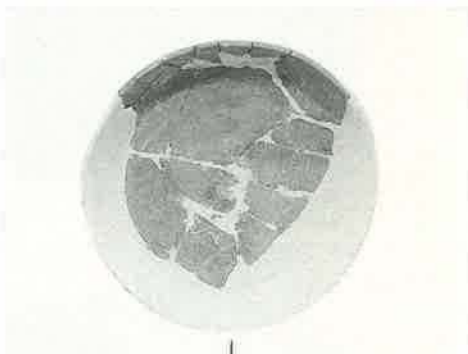
18



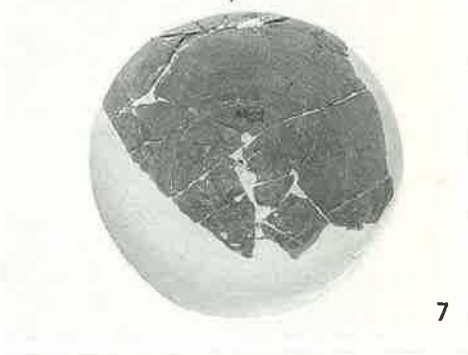
104



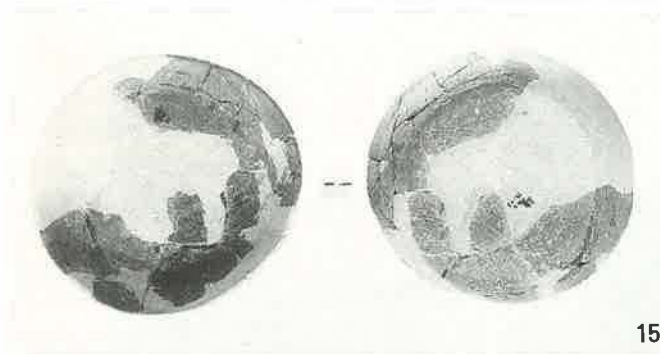
102



21



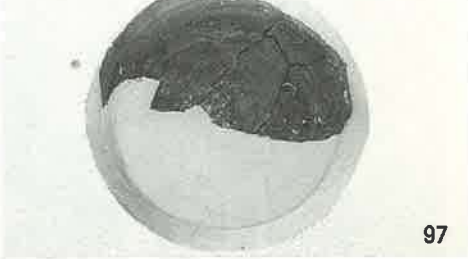
7



15



115



97



120



134



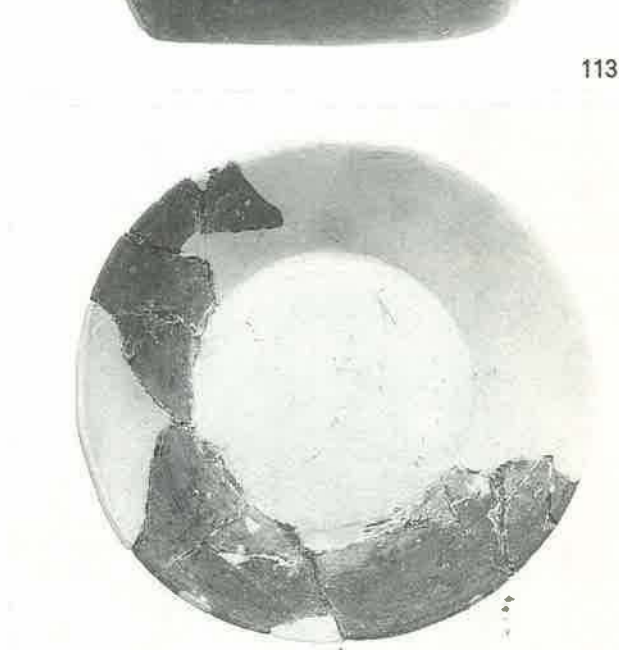
95



113



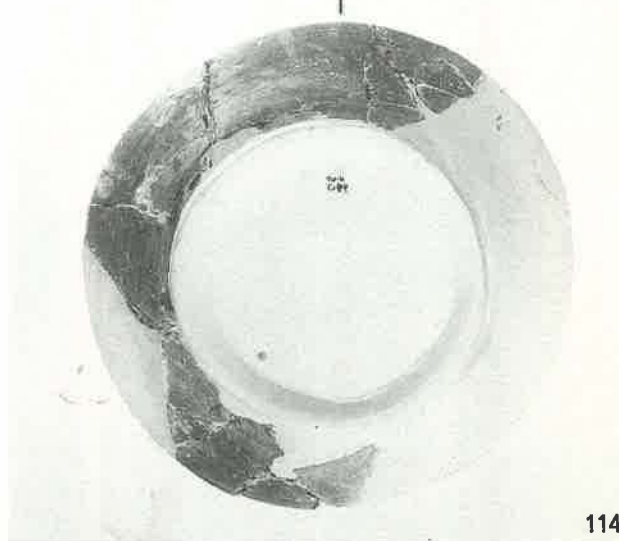
101



118



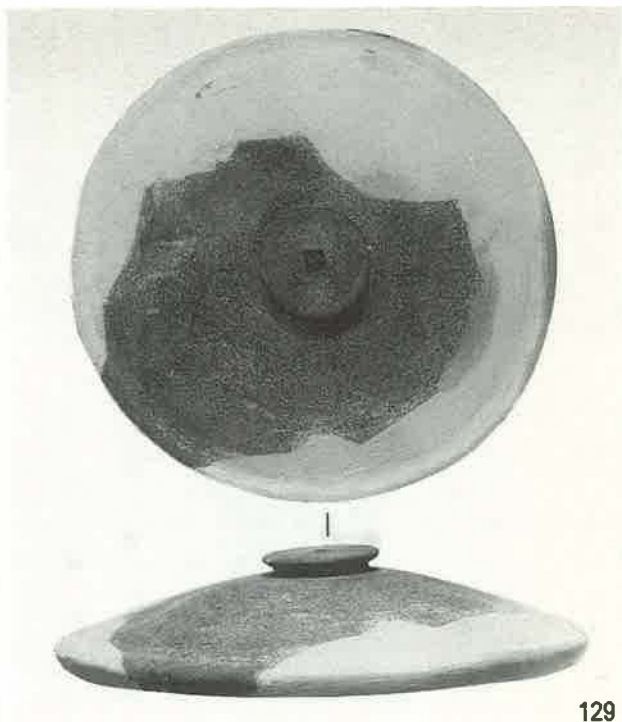
119



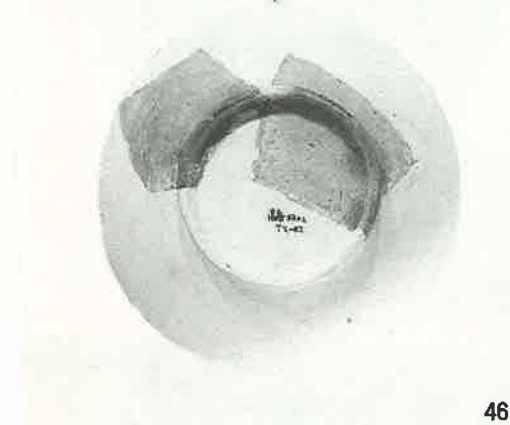
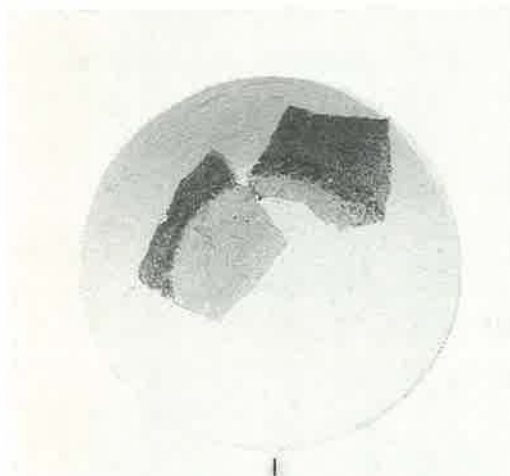
114



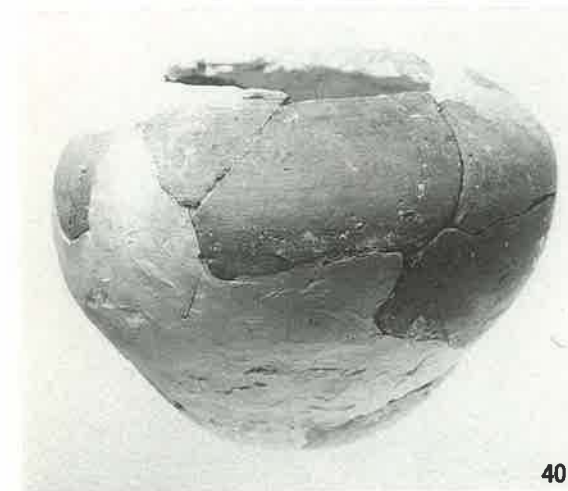
43



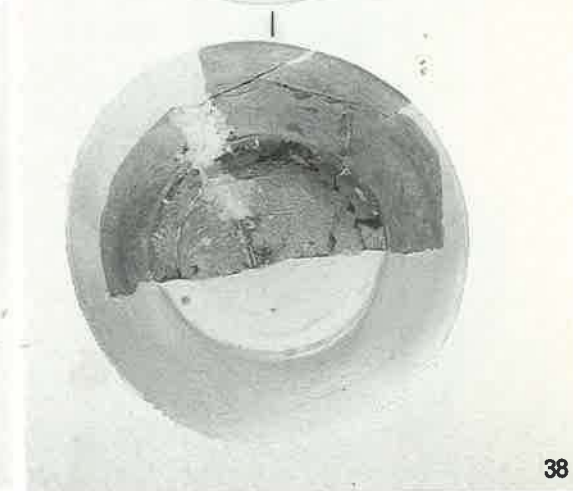
129



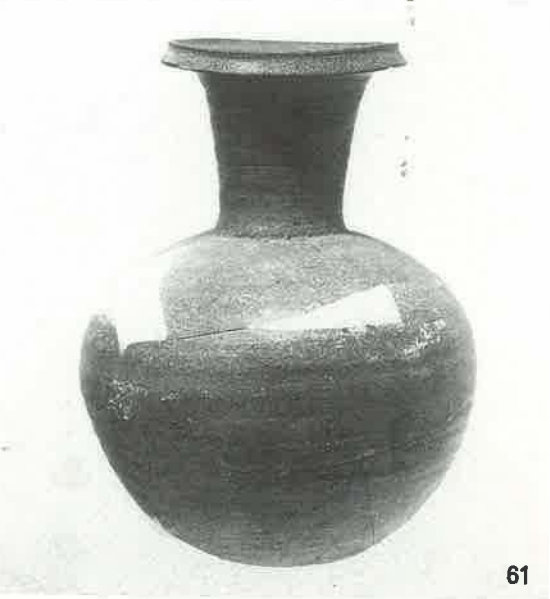
46



40



38

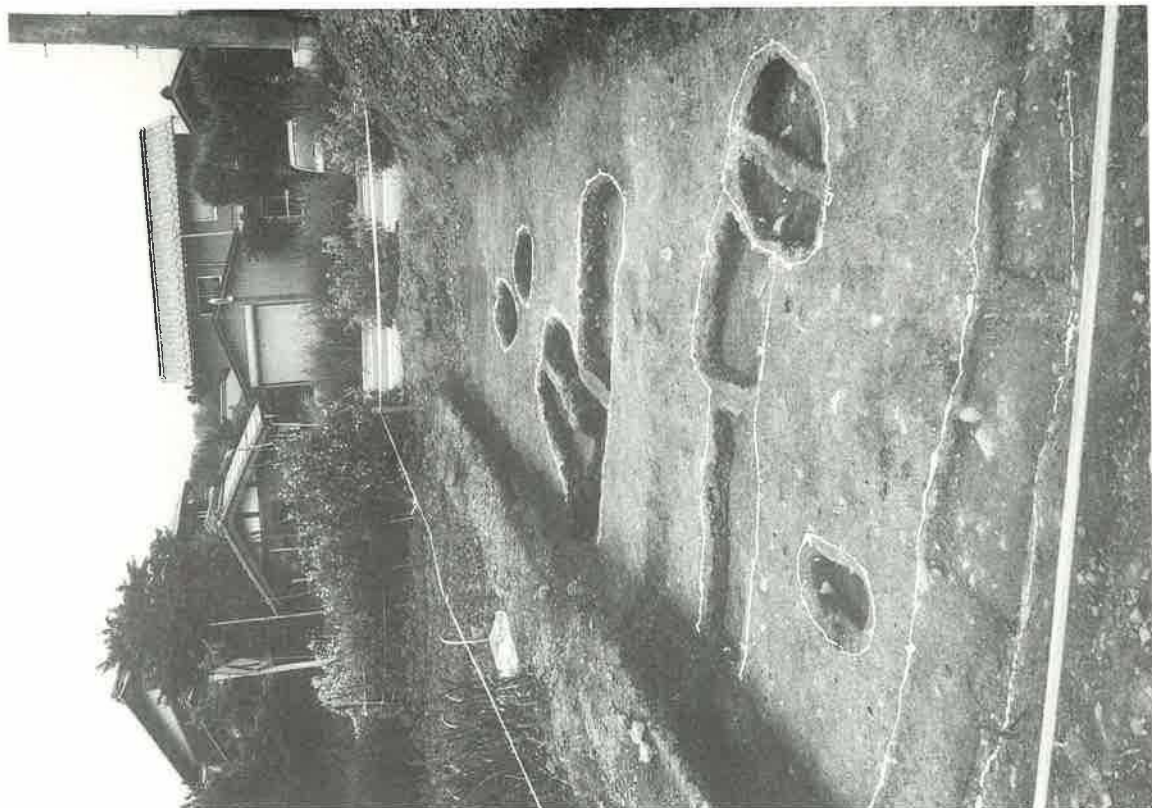




作業前状況（トレンチ1）



トレンチ1 全景



トレンチ2 遺構面1 (北東から)



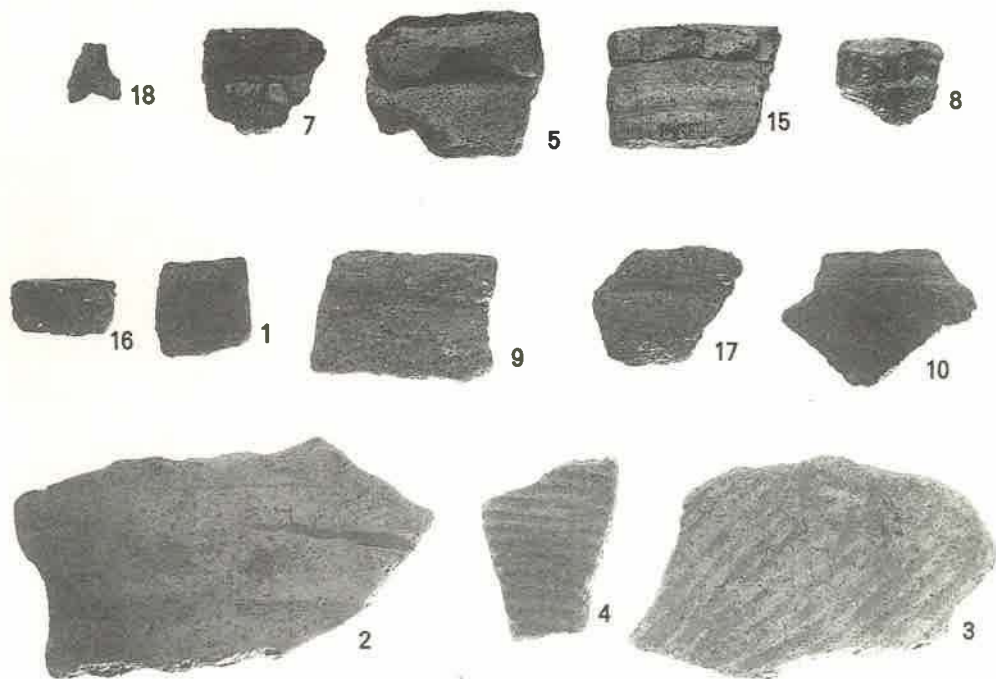
トレンチ2 遺構面2 (南西から)



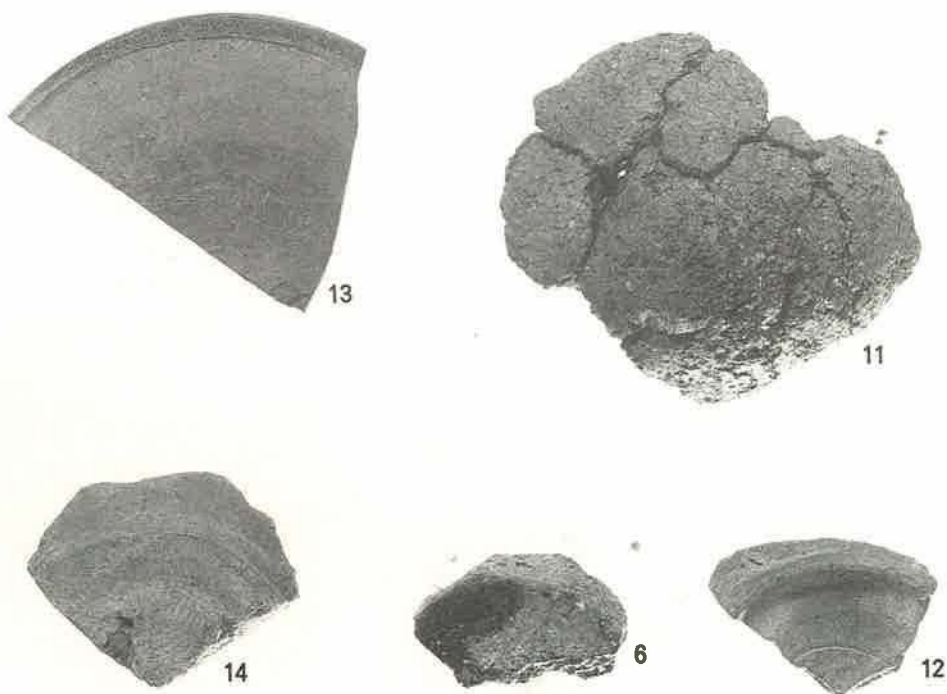
集石状遺構



集石上土器



出土遺物



出土遺物

伊吹町文化財調査報告書第4集
伊吹町内遺跡発掘調査Ⅰ

1992年3月

編集・発行 滋賀県坂田郡伊吹町教育委員会

印刷 立木印刷

